
誰が見る、今宵の虹

柊鏡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

誰が見る、今宵の虹

【Nコード】

N8066H

【作者名】

柊鏡

【あらすじ】

「ねえ、バベッジ」自慢のアッシュブロンドをたおやかな指先で軽く漉きながら、エイダは身体を半分だけよじって、背後を向いた。振り返りざまに、肩甲骨よりも遥かに長い髪が揺れては広がった。木目細かい毛の一つ一つが電灯の光にきらめく。狭い部屋の中央のソファにふんぞり返っていたバベッジは、身を起こした。ぞんざいに頭を掻く。

ブローグ

ブローグ

「ねえ、バベツジ」

自慢のアッシュブロンドをたおやかな指先で軽く漉きながら、エイダは身体を半分だけよじって、背後を向いた。振り返りざまに、肩甲骨よりも遥かに長い髪が揺れては広がった。木目細かい毛の一つ一つが電灯の光にきらめく。

狭い部屋の中央のソファにふんぞり返っていたバベツジは、身を起こした。ぞんざいに頭を掻く。

無精髭を生やした、いかにもウダツのあがらなそうな男だ。アルマーニのシャツを着てはいるが、長く洗濯されている様子がなくクツシャクツシャになって皺だらけ。ワイシャツの襟には汗のつくつた黄ばみがありありと見て取れる。

「なんだよ。エイダ」

声にも覇気がなく、めんどくさそうにしている。今まで寝ていたのだろう——うつろな眼球表面は湿り気を帯びていた。

むつつりと頬を膨らますエイダ。筋の通った高い鼻にひっかけた容姿とおよそ不釣り合い。見るからにやぼったい眼鏡のツルをくいくいと調整し、

「あのさ、そろそろいいんじゃないかなあって」

「何の話だよ」

「フェイクよ。フェイク。ようやく完成の目処が立ったのよ。これで、このくそ暑い部屋からおさらばできるってこと」

エイダは部屋を見回してから、わざとらしい嘆息と共に告げた。

本当にこの部屋は暑苦しい。蒸し風呂みたいなのだ。サウナ好きなら狂喜乱舞したかもしれない、けれど、いかにサウナフリークでも四六時中サウナに入り浸りたくはないだろう。

「あー、せいせいする。あーせいせいする」とてつもなく重要なことなので、彼女は二回続けて言った。

彼らの部屋は本来、狭くはない。テニスコートくらいの広さは持っている。天井だってエイダの背丈の二倍近い。

それが現在、四畳半ほどのスペースしかない原因は一つしかない。部屋中をぐるっと取り囲むようにして設置されたコンピュータどものせいだ。きやつらは、住人のことなどおくびにも気にかけず、しかつめらしく部屋を占領しているのだ。

幾重にも横方向、そして縦方向の両方に重なり合った本棚のような設備がいくつもある。ステンレス製のそれらには抽斗がついていて、そこに基盤の入ったケースをぶち込み、コンピューティングサーバーとして運用している。いわゆる、計算工学向けのスーパーコンピュータだ。気象庁が、天候や気象のシミュレーションの為に所持しているような豪快なブツである。

たった一基のコンピュータにできることなど、高が知れている。そこで、幾つものコンピュータをネットワークで連結することで性能の向上を図っているのだ。

直列処理では限界がある関係上、各コンピュータをノード——特定の処理だけをおこなうもの——として扱い、並列処理を行う。正確には異なるが、ニューラルネットをパーセプトロンと結び付けて考えれば、人間の脳細胞に似ている機構と思えばいい。

この運用方法はインターコネクト方式と呼ばれ、昨今一般的なスーパーコンピュータの構成方式として流布している。

それぞれのコンピュータはルートノードではなく、一介のノードであるので、人体でいえば手足のようなものだ。手足だけでは、意味がない。なので、それらを統括する頭——脳味噌が必要になる。それがエイダが向かっているコンピュータである。

ネットワークを介し、全てのコンピュータの演算結果を纏め上げ、キーボードからのインプットで命令をくだす。アウトプットはディスプレイ上にて、頭が痛くなるような文字列の列挙で示される。ル

ートノードの役割も持ち、それぞれの終端ノードを統率しているわけだ。

見た目は普通の家庭用コンピュータと同じだ。GUI（ユーザーグラフィカルインターフェース）もMSウィンドウズと少しも変ったところはない。機能自体も大差なく、その証拠にスピーカーから『胡桃割り人形』の第四曲部分が大音響で垂れ流され、部屋中に充ちている。通常のパーソナルコンピュータとしても、使われているのである。

ボーズ製のばかつかいスピーカーから飛び出す音が、むやみやたらに大きいのは、大量のコンピュータのファンが立てるざわめきがうるさいからだ。一人で音楽鑑賞するときのとき音量では、聞こえやしない。

スーパーコンピュータに独自のOSが用いられたのは昔のこと。互換性やコストパフォーマンスを重視した結果、既存のOSやアーキテクチャを流用した方がよいとエンジニアの多くが気付いた。

おかげで、昨今では独自規格のOSやアーキテクチャのコンピュータにお目にかかれるチャンスがめつきり減った。もちろん、x86プロセッサ上を走っているのは、オープンソースのOSをマイナーチェンジして使っている場合が大半なのだが。

「ああ、暑い。暑い」

空色の清楚なワンピースの胸元を広げて、エイダはそこに風を送り込もうと、手をうちわにしてパタパタさせる。彼女の胸は小さいので、ちよつと布地を広げただけで、胸部が見えそうだった。もちろん、色気もへつたくれもないスポーツブラが好奇の目から彼女を守ってくれるから、心配する必要はない。

室内気温は地獄温泉。床に敷かれた赤いカーペットがさながら、別府の『血の池地獄』に見えてくる。

コンピュータのCPUの一つ一つが放つ排熱量がささやかでも、総体となれば馬鹿にできない。何十台とあるのだから、ヒーターが幾つもあるようなものだ。窓は当然のように全開になっている

が、気休めにもなっていない。夏場だから外気も蒸し蒸ししているし、舞い込む風も生温い。

電化の宝刀、文明の利器エアコンなんて使えない。ただでさえ、コンピュータもが大電力を消費しているのだ。

電子の妖精たちのエンゲル係数はすさまじいことこのうえなく、月の電気代は目ん玉が飛びでんばかりの値段になってしまっている。電気メーターの検針係が、心配して「漏電してませんか？」と言ってくれたこともある。その次の検針ではたしか——「電気盗まれてませんか？」だった。

「で、完成したらどうすんの？」バベッジが言う。まるで他人事のような言いざまだった。

彼の態度に、イライラが募った。エイダは呼気荒く捲くし立てた。「はあ？ あんたが設計したんでしょが！ 私は雇われプログラマーなんだから、あんたが何に使うか知ったことじゃないけどさ！」よく頑張った。偉い偉い」

微笑みながら手を叩く。何だか気が抜けた。この男、マイペース過ぎる。絵に描いたような、典型的なダメンズだ。ダメンズウォーカーにでもサンプルとして提出してやろうか、とエイダは考えつつ言った。「それじゃ、お給金のお話をしましょうか」

エイダはコンピュータ前の椅子から立ち上がって、バベッジの座るソファの対面に座った。ガラステーブルの上に肘をつき、両手の甲を合わせて、そこに顎を乗せる。十台前半にしか見えない童顔をビジネススマイルでいっぱいにする。

「は？」

バベッジが背凭れから身を起こす。何で？ といわんばかりの顔でエイダを見てくる。何で？ はこっちの感慨である。エンプロイヤーがエンプロイヤーに金よこせ、というのは至って普通の行いだ。おかしいことは何も無い——はず。

「は？ って何？ 私、変なこと言ってないでしょう？」

「給料なんて払えないぞ」

机を思いつき叩いた。ガラスがぶつ壊れるかと思った。机上の灰皿がぐわんぐわんと浪打って、中の灰をぶちまけた。はらはらと床へ落ちて、真紅色のカーペットが汚く穢れる。舞い散るモクの灰に一瞥くれて、再びバベッジを見た。

白皙な膚に青い血管が浮いた。エイダの憤りがあらわになった。

「ふざけんな！ ふざけんな！」

憤慨していたので、二回言った。

「だって、まだ、仕事終わってないし」

「ふざけ——」と言おうとして、「え？」

「サービス開始したら、色々あるだろう。客への対応、アフターサービス。つまり、そっちの業務も……」

「バベッジ！ あんたって人はッ！」今度はガラステーブルの足を蹴った。天板が少しだけ横にズレた。「私はプログラマーであってサービスコールの嬢じゃないんだけど？ そこんとこ、了解してんでしょうね？」

「解ってる。解ってる。技術的サポートだよ。うん」

「で？ 給料は？」

目を眇める。早く、出せ。手形でも小切手でもキャッシュでも何だっていいから、さっさと出せ。強引に怒りを引っ込める。マッククルーに是非なってくださいと懇願されそうなくらい、瑕疵のないビジネススマイルをつくった。それでも、目だけは炯々と輝かせ、バベッジへ射殺するような眼光を注ぐ。

すると、バベッジがごそごそと自分の鞆を漁り始めた。

何かをテーブルの上に投げる。預金通帳だった。

「開いてみな」

絶句した。彼の預金残高はたった五円なのだ。五円——ご縁。バベッジとの、これからも続くご縁。いやだぞ、そんなのは。と思った。

とりあえず、通帳をペラペラとめくることにした。最初のページには五千万円とある。なかなかの大金だ。それが半年で半分になり、

一年で更に半分になり、おそるべきことに一年半後の日付——一昨日だ——では五円。

HDDやCPU自体の価格帯が下がり、サブプライムローンのあとの円高で輸入品が安くなったとはいえ、これだけの設備を購入するには相当の金銭が要るのだろう。

この事務所の賃貸費用だって都内でしかも、二十三区なのだから、数十万はかたい。そんなことは承知の上だ。しかし、雇用相手に払う金がないとは、どういう見か。

「おい。おい。いいいいいい！　ただ働きかよ！　これじゃ、今日の晩御飯も食えないじゃない！」

「それは、ほら、ツケでさ」

ダメだ。この男。経済感覚が破綻している。

この男——ヘンリー——バベッジは、インフォメーション・テクノロジーの分野ではそれなりに名の通った人物であり、認知心理学や言語学にも篤い。が、経済学には門外漢なのか。いやいや、ケインズのケの字を知らない人だってここまで金銭感覚がハチャメチャってことはないはずだ。何と言ったか、ホモ「うんたら。そうそう、人間は経済的動物であるとかなんとか……。ホモ「エコノミクス？　まあ、そんなことはいい。

ここでブチ切れしてしまいたい。けれども、そんなことしたら本当にタダ働きだ。そんなの、御免こうむりたい。

「解った。バベッジ。サービス開始しても付き合ってあげる。その代わり、売り上げは全部、私がもらう。それでOK？」

「うん。いいよ」

何でも無いように言いやがる。儲ける気がないのか。だったら、何でフェイクなんてものを造ったのか、と小一時間問い詰めたい。木馬に乗せて、ケツを鞭打ってでも聞き出したい。一年半もの付き合いになるわけだが、まだまだこの男のキャラクターが解らないエイダであった。

バベッジの正確な年齢はエイダも知らないが、彼女の見立ててで

は四十台くらい。きちんとした身なりをすれば、渋いオヤジでモテるだろうに……。いったい、今までどうやって食いつないできたというのだ？ 不思議でならない。

エイダはまだ二十台前半だが、世渡りに関する限り、彼よりも上手いような気がしたが、すぐにそれは否定された。こんな男の下で働いている時点で、自分も十分に世渡りが下手だ。エンプロイヤーの良し悪しを判定できなかったのは自分の責に違いない。

「じゃ、さっそく、フェイクを配布しよう」

少年のような笑顔でバベツジは言った。さーて、これからゲームするぞ！ と意気込むガキンチョのようだった。

「はいはい」

本当に給料がもらえるのか不安で不安でしょうがなかったが、従う他ないだろう。投資したことを惜しんで余計な労を重ねるのをサノコストという。そんな経済学の知識があっても、結局、流されてしまうエイダだった。

仕方ない面もあったが、エトドカタと言われる情報産業に数年従事していた身としては、バベツジのような夢追い人に付き合っているのも悪くない、と心の底では思っているのかもしれない。まったくうなソースコードをばちばち書いていても、まあ、結局馬鹿を見るんだから、なんて。

それでもやつぱり、むかつくので、BGMを『胡桃割り人形』からモーツアルトのピアノソナタ第十一番、通称『トルコ行進曲』に変えた。ハイドンの『軍隊』でもよかったかもしれない。『胡桃割り人形』？ 縁起でもない……。組曲の最後は夢オチで終わるのだから。それは一年半の苦労が徒労に変わる瞬間だ。

アナトリアから軍楽隊を引き連れて、威風堂々トランシルヴァニアに攻め込むオスマン軍の雰囲気でも味わってやる、そんな気分だった。シンバルとラッパ、そしてトライアングルの響きがきつついメロディが流れ始めた。

ケーススタディー マイフェアガール

ケーススタディー マイフェアガール

一

片代杭かたしろくと最初に出会ったのは中学校の入学式だった。体育館へと続く並木には、櫻が咲いていた。花びらのいくつかはグラウンドに落ちて、雑踏に蹴散らされ、ソールで踏まれ、泥をかぶって、汚い茶色に染まっていた。

母親と共に体育館を目指す新入生たちは、中学生といっても、多くはシヨンベン臭い小学生と大差なかった。母親と手を繋いでいるものさえいた。

そんな中であって、彼女の実在感はずきん出ている。ほとぼしるオーラが違ったんだ。雑草の茂みに、自然界にはあり得ないはずの――青いバラが紛れ込んでいるかのようなだった。そのくらい浮いていた。

大人びたその顔と雰囲気にはくは呑まれた。ぼく――稲浜南は十二歳で初恋をした。一目惚れだった。人を容姿で好きになるなんてそんなのクジャクだ。鳥みたいだ、と思っていたのに、これは今でも続いている。五年越しの恋路だ。

ぼくらは、今年の春に高校二年生になった。

彼女は案の定、モテた。男女のいかんは問わなかった。神様というのは不公平なヤツで、気分屋で、むちゃくちゃ人の情を理解しないので、だから、ふとした思い付きで一個の人間に一物では飽き足らず、二物も三物も与えてしまう。何一つ授からなかったものとしては、憎らしいこと甚だしい。

杭は文武両道のうえ、スタイルのよい美人だったし、唯一の欠点はちよつと背が低いことだったが、気立てもよかった。ぼくなんか

にも、氣さくに話しかけてくれるくらいに。

ぼくにはトモダチがいなかった。生来、人と話すのが得意じゃなかったし、どうして他人と付き合えばいいのか、誰も教えてはくれなかった。いや——教授されなくても自然に身につくのかもしれないけど、ぼくは身につかなかった。

中学二年生のときに「おまえって、何が楽しくて生きてるの？」と面と向った状態で言われたことを憶えている。これは、生徒のものではなく、教師の言葉だ。教育者にすら、ぼくは見限られていたのだ。

事務的な会話以外でぼくが言葉を交わすのは、杭しかいなかった教室にいたのが何だか億劫で、休み時間、クラスの中にとどまっていることは稀だった。

弁当は屋上で食べた。たまに砂粒が舞い込んでくる以外の不便はなかった。むしろ、夏場はぽかぽか陽気に当てられてなんだか気持ちよかったし、秋は小春日和、冬だって豪雪地帯でもなく日差しは暖かいのだった。

世の中には、便所飯というものがあって、イジメられっ子は誰にも見つからぬように、トイレで弁当を食べるんだそうだ。あいにくと、ぼくはいわゆる空気で、存在そのものがないことにされていたから、イジメによるシカトとはちよつと違った。イジメられっ子本人は辛いかもしれないが、彼らは、まだ、存在を認められている。それは、幾分がぼくよりもマシなんじゃないかと、常々思っていた。昼休みは長いので食事だけでは、とうてい時間を潰せず、図書室に入り浸った。最初のうちは日本語の本を読んでいた。だけど、そのうち英語で書かれた本を読むようになった。英語の本だと、現実感が遠くなるから、自分にとてもよく合っていたんだと思う。

イギリスにもアメリカにも行ったことはないから、英語のそのものがファンタジーだった。ハリウッド映画は生身の俳優が出ていたところで、ファンタジー性は変ったりしない。合衆国は本当はデブの闊歩する国だし、イギリスは身分制度の差別社会に包まれた国だ。

でも、そんなこと日本に棲むぼくには関係がない。

毎日のように読んでいた。しかし、それでも、英語の成績はよくなかった。日本語が介在するのがイヤだったから英英辞典を使っていたのだ。

教師に当てられたとき、「Realityは、あなたがstopするとき、believingを、それを、goしないawayには」と言ったら、「ふざけんな」と怒られ、廊下に立たされた。でも、おかしい。RealityはRealityなんであって、何だって言うんだろう？ 上手く訳すって何だ？ 自分たちの身近な言語に変換することで安息しているだけの様な気がしてならなかった。日本語訳された『ワースワース』が愚にもつかないものになっているのと同じで……。

中学のころ、杭は毎日のように図書室にやってきた。彼女はなぜか、いつも同じ本を読んでた。たいてい、ぼくの向い側に座った。書名は『ドグラ・マグラ上巻』。三年間も彼女はその本だけを読んでいた。ついで、彼女が下巻を読む姿を見たことはなかった。さぞや、難解なのだろうと思い、読んでみたら、キチガイ小説だった。難解——かどうかは解らないが、一読で把握できるようなものではないのは確かだった。彼女らしくない、チョイスだった。どちらかといえば、ぼくに似合っている作風だと思った。

初めて彼女にぼくの側から話しかけたのは、二年生の終わりだった。どうしても気になってしょうがなかったのだ。

まず、話しかけると、どんな風に呼びかけるべきか？ あいさつする？ いきなり、名前を呼ぶ？ そんな些末にぼくは拘泥した。でも、結局はストレートに訊ねることになった。絡め手の手管など、識らなかったのだ。

「片代さん……どうして、いつも同じ本読んでるの？」

彼女は目をしばたかせたあと、言った。「別に、何でもいいんだよ」

「何でも？」

「うん。何でもいいんだ。——ただね、ほら、この表紙絵」文庫本を掲げた。「——なんかエロいじゃん」

確かにちよつといやらしい表紙だった。ズリネタにはならないけど、なんだか、変な絵だった。斜視のような目付きの女が大股開きで描いてある。

「そういう話なの？」

「どうなんだろうね」曖昧な顔付になった。まるで、内容を知らないみたいだった。読んでいるんだからありえないはずなのに、だ。

「あ——でもね、冒頭がおもしろいよ」杭は一旦言葉を区切って深呼吸した。指をタクトのように左右に振りながら続けた。「胎児よ、胎児よ。なぜ踊る？ 母親の心が解つて、恐ろしいのか？」

詩を朗読しているみたいだった。特徴的な声質を彼女は持っていて、やや鼻にかかったところがある。

顔立ちは凄く大人びているのに、声は拙い感じ。どうしようもないギャップがある。これも含めて、ぼくは好きだった。聖徳太子じゃないけれど、かましい女子たちの話し声の輪の中から、彼女の声だけを拾うこともできるくらいだ。

「何それ？ 詩？」

「識^しらない」イタズラを咎められた子供のように、彼女は屈託なく笑うのだった。にまにましながら、杭はぼくの手元を見た。そこには薄手のペーパーバックが握られている。「ナンくんは、いつも洋書、読んでるよね？ なんてかな？」

ナンくんというのは、ぼくのことだ。彼女だけが呼んでくれる、ぼくの渾名。彼女がつけてくれた。『南』を音読みして、ナンとのこと。杭は自分の渾名が『コウ』だったのでそれに倣ったんだと思う。本当のところは少しも気に入ってはいなかったが、彼女が呼んでくれるのなら、それは気に入っているのと同義だった。

「なんとなく」

「ふうん。なんとなく、か。案外、そんなものなのかもねえ」独り言のようにうんうん頷く。それから、手をクラップした。「——じ

「やあ、英語教えてよ」

どうして、ぼくが彼女に英語を教えることになるのか。話の展開についていけなかった。女の子というのは、辻褃の合わない話をするもんだと、どこかで聞いたのを思い出した。たぶん、クラスのスケコマシどもが話していたんだろう。

「……無理だよ」

「何で？」

「片代さんの方がずっと成績いいじゃない……」

ちよつと心外そうな顔をしてから、彼女は『ドグラ』『マグラ上巻』を閉じて、机の上に置いた。エロ目の表紙が下になっている。

「成績とか、関係ないの」

彼女は怒っていた。毛抜きもしていないのに整った眉が大きく歪んでいた。ぼくの発言の、一体全体どこあたりが逆鱗に触れてしまったのか、さっぱりだった。さっぱりだったけれど、ぼくは「ごめん」と言った。

杭はすぐには応えず、図書館の壁かけ時計の分針がふた回りしたところで、言った。「私こそ、ごめんなさい」

その日はなんとなく気まずくなっただけれど、次の日も次の日も何事もなかったかのように、杭は図書室にきて、『ドグラ』『マグラ上巻』を読んでいた。四十五分の昼休み、二言三言会話を交わすだけの日々は卒業まで続いた。彼女とぼくの距離は、図書室にある机の天板の差し渡しより、短くなることはなかった。長くなることもなかった。

中学生のときは毎日がこんな調子だった。だけど、高校に進学してからとはがらりと変った。話す機会がさらに輪をかけて減った。正確に言えば、ぼくが彼女のことを避けるようになった。

中学時代と同じくして、あいかわらず空気の存在で、ネクラなパトナリティーを持つべくにとって——色気づく年頃のクラスメイトたちはまぶしく、目を逸らすしかなかった。目ん玉が潰れてしまっただと、本気で感じた。

青春は、アルコールに、どこか似ている。下戸にとっては毒でしかなくって、呑み過ぎてもダメ。そして、ぼくは下戸だった。青春分解酵素はなかった。臭気にあてられただけでも、かたっぱしから嘔吐感を催すのだった。

杭もどんどん魅力的になっていった。そして、毎日忙しそうだった。

水泳部と天文部を掛け持ちしていて、図書委員長をしていた。部活や委員会活動のない日でも、新しいスイーツショップが駅前に云々、なんたらかんらたの新譜が云々、さあカラオケだ、などと——やっぱり忙しそうなのだった。青春を謳歌しているのは明らかで、ぼくたちの距離は果てしなく離れてしまうのも当たり前だった。

彼女は太陽神だ。陽の女神がいなくて、月読命は輝かない。杭を取り巻く男子たちは、衛星なのだった。翻って、ぼくはといったら暗黒の中、ぶらぶらと漂っているアステロイドに違いない。名前はあるのに、誰も名前も識らない……そんな……。

ぼくは願っていた。

ぼくのような存在と話すと、彼女の評判がきつとさがる。だから避けたんだ。彼女が図書委員長をしている関係上、図書室にも行けなくなった。

ぼくの唯一のトモダチは、物言わぬ、屋上の塔屋の上に載った給水タンクだけだった。こいつの膚は、夏場には太陽光で熱く、冬場には冷気に当てられて氷のようだった。けれど、泰然自若としているさまは、心強くもあつた。

中坊というのはエロに関してだけは絶大な関心があつても、セクシャルじゃなくジェンダーの差には疎いし、まだまだ子供で社会性も未熟だ。されど、高校生にもなると違ってくる。高卒で働く人もいるし、旧い時代には元服があつて大人の仲間入りをした。

広く、複雑で、とらえどころのない社会というものが目前にまでやってきている時節。さあ、モラトリウムを続けるか？ と訊ねられ、大学に行くにせよ、やっぱり、そこは高校以上に社会が頭の上

から降って来るに違いない。

着々と、自分たちの周囲に垣根ができあがっていく。社会の垣根が。囲い込みだ。羊たちはシェパードにがんがん吠えられ、囲いに入る。

狭い学校という社会にも建前や世間体が君臨していて、それは垣根を越境せんとする人をしばきあげる。杭には、一番綺麗な芝を囲んだ垣根の中にいて欲しかった。

ばったり鉢合わせすることもあった。そんなときは、俯く。彼女もぼくを呼び止めたりはしなかった。きっと、解っていたんだと思う。ぼくたちの間には簡単に乗り越えられるのに、簡単に越えてはならない垣根があることを。

これでいいんだ、と自分に言い聞かせても、ぼくの慕情は消えなかった。むしろ、募った。募る一方だった。だんだんと、自分で自分がどうしようもない方向に向かっているのを感じて、背筋が寒くなった。

ぼくは彼女が欲しかった。片代杭をぼくのものにしたくてたまらなかった。——ぼくだけのものに。

二

杭を呼び出さなくてはいけなくなった。

彼女はぼくの隣のクラスだったから、行くのは簡単なことだった。それなのに、足は重く、鉛のようで、頭をかかえながら昼休みが到来しないことを願った。

もちろん、当たり前のように時間は流れた。昼休みがやってきた。念じたところで時間は止まらない。ぼくに、スタンド能力は——ない。

無慈悲なチャイムがなった。キンコーンカーコン。『ウェストミンスターの鐘』だ。遠い異国のビッグベンすら、ぼくを追い立て

る。

立ち上がった。

すでに、昼休みになってから十五分が経過していた。すでに昼食を終えた生徒もちらほらいて、グラウンドからは威勢のいい掛け声が否が応にも聞こえてきた。眩暈がした。心臓がバクバクする。胃酸の味がするような気がして、咽を押さえた。

ズボンのポケットに手をつっ込んで、その中身があることを確かめて、唾を嚥下した。——行こう。

四組の扉の前に立っていると、底抜けに明るそうな女生徒がぴよっこぴよっこと跳ねながらやってきた。比喻じゃなしに、本当に跳ねていた。「何かご用？」

「片代さん、呼んでくれないかな？」

「コウちゃん？ はいはい。ブラジャー」なぜか胸元で敬礼っぽいことをして、彼女はくるつと反転した。ウイंकを一つ。「待っててね。稲浜くん」

結構、待った。杭の姿は確認できた。

彼女はなにやら押し問答をしている。取次ぎをしてくれた女生徒と、そのほか数名——トモダチだろう——が杭の手を引こうとし、彼女はなにかを喚んでいる。彼女にしては珍しく、落ち着きがまるでなかった。

ぼくと会うことを拒否しているのかと思った。けれど、すぐにそうじゃないことが解った。彼女たちの声が大きくなっているから内容が聞き取れるようになったのだ。

「ほらほら！ 稲浜くんが待ってるぞー！」

「いやだッ！ 私はいかないッ！」

「なんでー？ あー、あれ？ 例の好きな人が云々？」

「だから！」バンと杭は机を叩いた。周りは彼女の気迫にあてられ、静まった。「そういう風に言われたくないからッ！ それに——ナくんだって、その……」最初のテンションは消えて、尻すぼみになった。「迷惑だと……」

「馬鹿じゃないのーお？」さっきの女生徒だ。「メーワクなら呼び出さないでしょ？ はいはい、行った行った」杭の腕をむんずと掴んで、背後に回り、ぐいぐい押しながらぼくの前までつれてくると、「お待たせ」

「……久しぶりだね」

最初に口を開いたのは杭だった。

久方振りに近くで耳にした声は、鼻にかかっていた。

「そうだね……」

「じゃあ、しつぽりとどうぞ」

につしと笑いながら、ぴよこぴよこ女子はそそくさとクラスに戻った。絶対になにか勘違いしている。神様に誓っている。ぼくは彼女が思っているようなことをしようとは思っていない。そもそも——できるものか。

廊下の窓際で、ぼくらは向かい合っている。

気まずい。空気が重い。見えない何かが、のしかかってくるみたいだ。でも、事態は進んでいる。だから、ぼくはもう立ち止まれなかった。

トレードマークの、艶やかな長髪をややアップ気味にしたツーテールを所在なげに触っている杭。漉かれる髪の手。毛染めもブリーチもしていない——髪。

意を決する。

「あのさ、話があるんだ……」

「うん」

「放課後に——」

杭が俯いた。それから片手でスカートのポケットをいじくりつつ、小さな声でぼくの言葉を遮った。「放送室」

「え？」

「ほ、放送室で聞く。その——話」

「うん……」

どうして彼女が放送室を指定してきたのか、解らなかった。けど、

それは悪いことじゃなかった。むしろ、好都合だ。ぼくは杭を屋上にくるように言うつもりだったのだが、ぼくがこれからしようとしていることには放送室の方がずっと適している。彼女の提案を拒む道理はどこにもないのだった。

「それだけ——かな？」

「それだけ……」

「じゃあね、戻る。——放課後に、またね」

杭は逃げるようにぼくの目の前からいなくなった。なんだか、心に穴が空いたような気がして、寂寥感のある風が胸中に吹いた。

放送室には鍵がかかっていた。これは当然のことだった。誰でも無断で入っていいような部屋じゃない。

ぼくは、放送室の前で杭がくるのを待った。壁に背中を預けて——どれくらい待っただろうか。二時間は呆^{ぼう}つとしていたかもしれない。もっと長かったかもしれないが、目分量よりも短いということではなかった。

「ごめん。待たせたね……」

杭は肩で息をしていた。そうとう急いできたみたいだ。髪の毛が濡れていた。乾かす暇さえも惜しんで部活を切り上げたんだろう。水泳部の部室にはドライヤーがあることをぼくは識っている。

「別に、そんなに待ってないよ」嘘を言った。ほんとうは、焦れまくっていた。しかし——おくびにも出す気はない。

「いま、鍵あけるね」

彼女は放送室の鍵を持っていた。職員室で借りたんだろう。成績優秀な生徒だからこそできる芸当だ。

ぼくが貸してくれ、といっても無理だ。なんやかんやと難癖をつけられて、最終的に借りられないことになる。教師は品行さとテストの得点の良し悪しであからさまに生徒を差別する。もちろん、彼らも人間なので、そのことは致し方ないし、悪い、とも思わないけど。

そういえば――杭は本来ならもつと上の進学校に行っていたはずだった。ぼくは家から近いという理由と、成績の関係でここしか通らないという二つの理由で現在の高校を受験したが、彼女はもつと上位の高校を受験できるだけの成績を持っていた。さすがに万年一位なんてことはなかったけれど、それに近かった。

ぼくと同じで――遠方まで一時間くらいかけて、通学するのが億劫だったのだろうか？ 訊いたことはなかった。だから、解りようがない。識りようがない。

「あいたよ。おいで」

放送室の框を跨いだ彼女に続いた。

後手にドアを閉める。カタンと厚手の扉が音を立てた。

わけの解らない機器が放送室の大部分を占めていた。余ったスペースもテープやLD盤がそこらじゅうに散乱し、ごみごみしている。ゴミ箱にカップメンのトレイが入っているのが、謎だ。そして、ぼくの思惑通り、放送室は防音構造になっていた。

「あのさ……」

ぼくはポケットに手を入れた。指先にあたるプラスチックの塊。

録音機能搭載のMP3プレイヤーだ。録音の操作を手早く済ませた。最後に録音ボタンを押した。杭の目につかぬように、マイクだけを外に出す。

「あの？」

普段、放送委員――この学校に放送部はない。だから放課後には施錠されている――が使っていると思しきパイプ椅子に、いつの間にやら杭が座っていた。

ぼくはなにか話題を提供しなくてはいけなかった。なるだけ、会話をしなくちゃいけない。なのに、何も頭に浮かばない。杭は不思議そうにぼくを見ている。ぼくの二の句を待っている。だけど、何も言えなかった。

一向に話さないぼくに愛想をつかして、杭が言った。「何ヶ月振りに話したかな……」

中学校の頃を思い出した。いつも最初に話しかけてくるのは彼女だった。古い記憶を掘り起こすと、ぼくの側から口を開いたのは、『ドグラマグラ』のことを訊ねた、あの一回こっきりだった。

「半年？」

杭は首を左右に振る。

違ったみたいだ。

彼女は溜息混じりに言う。「もっとだよ。一年以上だよ。最後に

——話したのは、『校舎が広いね。化学室どこ？』だったもん」

「そうだったかな……」

思い出せなかった。どうしてだろう？　なんで、忘れてしまっているのだろうか？

無性に悲しく、そして、悔しい。

「うん。私ね、てつきり嫌われたかなって——」

「そんなことはないよ」

覇気のある人間なら、唾を出しながら言うべき科白。でも、ぼくは語気を荒げることもしなかった。これがぼくのやり方だった。いや——こうしか反応できない人間なのだ。そんな風に生きて来たのだ。

「そつかあ……」困ったような顔をした。手遊びをした。そして、言った。「去年の、文化祭。どこにいたの？」

「え？」

「文化祭だよ。もうすぐじゃない。って——まだ、二ヶ月くらいあるかな。はは」

いつもの闊達な笑顔がそこにはなかった。機械人形みたいにぎこちなかった。作り笑いだってことが、すぐに解った。ぎこちなさそのものは些細な様子かもしれないが、彼女を観察してきたぼくには解った。

「サボったんだよ」

「そうだと思ってたんだ。ナンくんのクラス、去年は喫茶店だったでしょう？　私、行ったんだ。男子はみんな、執事コスプレしてた

でしょ？」

「そうなんじゃないかな」

ふだん目立たないクラスメイトでも張り切っている人はいた。執事喫茶というのがはやっている。と耳にした誰かが提案したはずだ。最近、はやりのアキハバラ特集とか、そんなのでやってたんじゃないかと思う。

ぼくは関わらなかった。学校が終わって放課になれば、すぐに帰ったから、実際のところ、「そうなんじゃないかな」としか応えられないのが実情だった。

「他人事みたいだね……」

「他人事だよ」

「うん——」頷きつつ、パイプ椅子を指差した。「ナンくんも座つてよ」

「いいよ」

「ダメ。座つて」

怒っていた。バンバンと椅子の背凭れを強かに叩く。

憤りを示す彼女を見るのは——これで三度目だ。

中学のときに一回、さつき彼女のクラスで一回。そして、三回目がいま。なかなかお目にかかれないことだから、ぼくは脳裏に刻んだ。じっくり深々と刻み込んでから、彼女の言う通りにした。

「それでさ、拝みに行ったの。ナンくんのチェンバーレイン（執事）なコス。それで——いなかったからさ」

「嫌いなんだよ。その……人が集まるの」

間髪入れずに杭が言った。杭は気にする様子はなかったが、声のトーンは落ちている。「識ってる。期待は——してなかった。中学のときだって、毎回そうだったもんね。それでさ、今年は——」

「今年もサボるよ」

「……そう——なんだ」

沈黙。

まだ、放送室に入ってからそんなに時間が経っていない。まだ、

会話量が足りない。もつともつと喋らなくちゃいけない。もつともつと、彼女の声を録音しないといけない。

会話を潰えさせてはならなかった。

「今年は、片代さんたちは何をするの？」

「まだ——片代さん。なんだね」

「だって……」

ぼくは、心の中では下の名前で彼女を呼んでも、対面して、実際に話すときはいつも片代さんだ。それ以外の呼び方は考えられなかった。

何度か、「コウって呼んで」と面と向かって言われた気がするし、ぼく以外のクラスメートはみんなそうしていたけど、ぼくにはできない。できるわけがないじゃないか。なんて——おこがましい……。呼ばない理由は追求されなかった。

何事もなかったかのように、文化祭の話題を彼女は続けた。

「うん。演劇だってさ」

「何をするの？」

「ベタベタだよ。『ああ、ロメオ、どうしてあなたはロメオなの？』ってやつ」

両手を広げて見せた。

やや高めの放送室の天井を彼女は見つめた。

悲哀に歪むジュリエットだった。

「ベタベタだね」

「でしょう！」急に杭のテンションがあがった。半ば坐面から身を乗り出すようにして彼女は捲く立てた。「私は反対したんだ。どうせなら——もつと奇々怪々なものをしようッ！　って。誰もしないような」

「たとえば？」

「うーん。そういわれると、なんだか応え難い。っていうかね、本当は主役——ジュリエットだけど、したくないんだ」

杭が主役なら、きつといい出来になると思った。何だってソツな

くこなす彼女のことだから、演技がダイコンってこともないはずだ。いまのだって、結構サマになったいたのだから。

もし、ぼくがやったなら、きつと酷いことになる。緊張で何も科白が言えなくなる。解りきっている。

「どうして——」

「疲れるんだ。それに私は——」

杭は肩こりのジェスチャーをした。

大袈裟すぎて、ロボットダンスみたいだったが、指摘はしない。

彼女はボディーランゲージが少々派手目なところがある。文字通り、身体中を使うのだ。たまに、「欧米か」ってツツコミしたくなる程度に。

「部活も掛け持ちしてるしね」

「え？ 何で識ってるの？」

「三号棟の観測所に入るのを見たんだ。プールでも見た」

「はは——。天文部と水泳部、掛け持ちだね。それから、図書——」
言いかけて彼女は言葉を咽の奥に引っ込めた。「どっちもあんまり疲れないよ。そりゃ、きちんと観測する場合、チームを組んでやることになるけど——星や太陽を見るのは独りでもできるし。水泳も一緒。リレーじゃなきゃ、個人技だから」
「そついうもんなんだ」

縁のないぼくには識らない世界のことだ。

ぼくは野球のルールだって、ちつとも憶えちゃいないんだから。ソフトボールが下投げで、野球が上投げ。軟式は？ 識らない。そして、どうでもいい。だけど、自由形Ⅱ（イコール）クロールではないことは識っている。

「うん。そついうもの——時間だね」腕時計を見ながら、言った。

「そろそろ、下校勧告の放送があるから」

「……解った」

「じゃあ、訊くよ。話したいこと、何？」

やおら、杭の顔が近づいた。びっくりしてしまい、思わず背中を

引いた。そのまま、ぼくは立ち上がった。

今こそ、ひめたる思いを吐き出すべき瞬間だった。

大きく息を吸い込んだ。

そして、すべての吸気と呼気に変えた。

「好きでした——」

杭の目が見開かれた。

彼女は呆けたようにぼくを見ている。

すぐさま、背中を向けた。そして、ぼくは放送室を後にした。

廊下に出てからは一目散に走った。

振り返らなかったが、背後で「コウちゃん、何してるの」「おい、こいつ石になつてんぞーッ！」という女子の声がした。下校勧告の放送を教師から任されている生徒だろう。そして、杭のトモダチなんだろう。

ああ——終わった。ぼくの恋路はこうして、終わった。いや——終わらせた。ぼくは、好きでしたという意味表明をただけで、だから、もう終わりなのだ。

彼女の気持ちがどうであれ、ぼくに付き合う気はないのだから。それに、「付き合ってください」の答えがイエスのはずがないじゃないか。

ポケットに手をつ込み、録音をとめた。

家へと帰る道すがら、坂本九『上を向いて歩こう』のメロディが頭の中で奏でられていた。実際、ぼくは上を向いていた。

空は——青かった。どこまでも、どこまでも。雲一つない天晴れ日だった。なのに曇っていた。

三

都市伝説。メディアが未熟な時代はいつも地方都市レベルで、首都圏の噂でもない限り、それ以上拡散するのには結構な時間がかか

った。人面犬や口裂け女は全国に膾炙した。しかし、埋もれてしまったものも無数にあっただろう。

けれど、いまは違う。インターネットがある。そして、むしろ、そのインターネットこそが都市伝説の舞台だったりする。

ぼくが『フェイク』という単語を最初に目にしたのは、いったいどのサイトだっただろう？ はつきりとは憶えていないが、それが人工知能に近い何かであることを識り、無性に興味を掻きたてられた。

調べていくうちに解ったのは、フェイクに対するネット上のコメントはどれもこれも、ネガティブなものが多数を占めていたことだ。人工知能研究の歴史というのは古い。

そもそも、現在のコンピュータの基礎——いわゆる、ノイマン型を作った物理学者にして数学者のフォン・ノイマンが自身の理論セルラー・オートマータに託したのは生命原理の一つ——自己増殖だった。

遺伝的アルゴリズムの創始者であるジョン・ヘンリー・ホランドにしたところで、彼はスーパーコンピュータを使う過程で、そこに生命的な何かを見た。

人工生命の夢は人類の旧くからの悲願だった。

ホムンクルスという人造生命をアルケミストたちは造ろうと必死だった。アルケミーそのものは中国発祥だが、いつの時代も人工生命に耽溺するのは西洋人だった。セルラー・オートマータの、オートマータという単語も自動人形という意味だ。

しかし、神様は人の生命を造る試みにはいつも辛く当たった。

真に人間的な意味での知能はさまざまな壁に阻まれ、実現しなかった。いまや、エンペドクトシステム——電化製品に組み込まれているレベルのものでさえ、人工知能と呼びならわされるようになってしまった。

「フレイム問題が解決されていない。ファジ理論やカオス理論の延長線上に、もっと別の理論があるんじゃないだろうか？ われわれ

は、パースペクティヴを間違っているのじゃないか？ 視座をかえたとき、ニュートン力学が通じない世界があることを識ったように」「あれは、過剰な期待感だったのだ。確率論が未来すらも予見すると期待されたのと一緒にだ。一足す一という簡単な数式にしても、高度に一般化されてはいるが——果たして、りんごとみかんを一個づつ足した場合、果たして、それは二個なのか？」

「つまるところ——コンピュータ上で知能を再現しようとするのは、原子分子から生命をつくるようなものだ。二セモノをつくるなら、フルクラッチはやるべきでは？ いやしかし、ウェットウェア的な試みは的を射ているのかもしれないが……」

「LISPといったところで、所詮、数字を言葉に置き換えただけだ。人間のシニフィエとシニフィアンとの関係性はもっとコンプレックス（複雑）なものはず。人間を記述するのが言語であるとすれば、言語学が曖昧模糊な状態で人間の模造など造れるものか」

と、反論は色々だった。

それでも、ぼくはひたすらに検索をした。フェイクというものを探した。

フェイクは普通に見付かった。

何の変哲もないウェブページに、フェイクのはあった。しかも、不思議なことに日本語のページで、至極あっさりしたレイアウトだった。HTMLだけで書かれたような——。無味乾燥なのだった。

ページにはフェイクについての記述があり、噂通り、人工知能であると書かれていた。ページの最下部にダウンロードできるリンク。ぼくは迷いもせず、クリックした。

ダウンロードはすぐに終わった。五分とかからなかった。光回線だからだろうか。

プロパティでファイルサイズを見ると一〇〇Mしかなかった。小さい。本当に人工知能として機能するのか、ここにきてぼくは不安に囚われた。

ファイルは圧縮されていた。解凍すると一二〇Mになったが、や

っぱり小さいことに変りはないのだった。

それでも、やるだけやってみようという気持ちになって、くだんのウェブページを開きなおした。しかし——不思議なことだったが、404 NOT FOUNDと出た。おかしい。更新しても何も変らない。回線が切れてしまったのかと思い、ホームに設定しているページを出してみた。問題なく表示された。

困った。これじゃ、使い方が解らない。

どうしたものかと考えあぐねた。けれど、すぐに解決した。圧縮されたいた中にテキストファイルが含まれていたのだ。それは、ただ、readmeという陳腐なタイトルだった。中身もそれに準じていた。製作者の名前もなく、使い方が簡潔で無機質な調子で書かれていた。

フェイクの初期設定の仕方

一、実行ファイルを選択します。

一、初期設定タブをクリックします。

一、フェイクに与える容貌のところに元となるファイルのアドレスを入れます。

一、ファイクに与える音声のところに元となるファイルのアドレスを入れます。

一、最後にフェイクの精製ボタンをクリックします。

注意・一度設定したら削除はできません。

「あれ？」

解凍元のファイルがなくなっていた。ゴミ箱に入れた覚えなどないのに、跡形もなくなっている。

ダウンロードページは消えてしまったし、こうなったら、初期設定を間違えるわけにはいかなかった。ぼくは焦った。

焦るとヘマをするクセがあるから、それを考えると余計に焦燥感

が振って来る。

焦らぬよう、焦らぬよう、気を遣いながら説明書を読み進める。

元となるファイルについて

一、容貌に関しては、動画、静止画、問いません。また、想像上のものだとしても、結構です。但し、画像が荒い場合やあまりにもデフォルメが過ぎたイラストなどの場合、不都合を来す恐れがあります。

一、音声に関しては、なるだけノイズがないものが好ましいです。雑多な人物の音声が入っている場合も、特定の人物の音声だけをスキャンする機能がフェイクにありませんので注意してください。

フェイクに読み取らせる画像データの入手は簡単だった。

杭は有名人だし、ファンも多い。だから、必然的に盗撮という不埒な手段に出る人物が多いのだ。ぼくは、彼ら盗撮者の根城である写真部へ足を運んだ。

トモダチのいないぼくではあるが、写真部が盗撮の巣窟であることぐらいは識っている。

何年も昔のポスタの張られた部室の木製ドアをノックすると、部長と名乗る生徒がひょっこり顔を出した。

いかにも写真撮ってますといった風体の男だった。ぼつさぼつさの髪に、いまだき珍しいやぼったい黒フレームのメガネ。しかもそのメガネをナルシスティックに動かすもんだから、いっそう、その感慨は強くなった。

「何か、用？」

「片代杭の——」

「ああ、それか」部長は目を輝かせた。待ってましたといわんばかりだった。部室の奥に一旦引込んでから、一冊の装丁本を手にし

て戻って来た「これだよ、これ。実は最後の一冊。運がよかったね」
「いくらですか？」

「三〇〇〇円」

正直、高いと思った。だが、ぼくはもちろん払った。

写真を手ししないとフェイクが形作られないのだから、払わない道理はどこにもないのだ。

「毎度あり」

にんまり笑顔の写真部部长。

きちんと装丁しているところから察するに、印刷所で刷ってもらっているのは確かだ。値段設定からして、何十冊も刷ってるんじゃないだろうか？ 写真部のよい資金源になっていることだろう。

しかも、シリーズNO6とある。代々受け継がれているのかもしれない。

校内の美人さんの盗撮。写真部の伝統。

まったく、いやな伝統だ。

長居なんてしたくもない。さっさと立ち去ろうと踵を返し、

「待ってくれよ。きみ、稲浜くんだろう？」

どうしてこいつはぼくの名前を識っている？

訝った。声を低くする。「そうですけど」

「きみも本になりたくないかい？」

「ハア？」

意味が解らなかった。

「取り分は七：三でどうだ？」

何を言っているんだ？ こいつ。

ぼくを写真にしてなにがおもしろいのだろう？

キトクな人もいたもんだ。

「用事は済みました。さようなら」

付き合ってられない。ぼくは部長に背中を向けた。

早歩きで部室を去る。

背中から、「五：五でもいいから！」とまったく、意味不明なこ

とを言っている彼の声がした。ガン無視したのは、言うまでもないことだ。

写真を手に入れたので、さっそくフェイクにデータを読み取らせた。

すると、五分くらいで杭を忠実に模したグラフィックがつくられた。こういった原理なのか解らないが、高度なシステムが編まれているのは確かだ。彼女と瓜二つの姿がそこにあるのだ。なんだか、これだけで満足してしまいそうだった。

ディスプレイに浮くコンピュータグラフィックスに、ぼくは見とれた。気付けば、半時間が経っていた。われながら、馬鹿なヤツだと思った。

画像のスキャンが終わったところで、つぎにぼくは音声を手せねばならない。

写真は杭に会うことなく手にすることができたが、音声はそうはいかない。

説明書に書かれているように彼女の声だけが必要なのだ。つまり

——じかに相対するしか方法が思いつかない。

録音器具も用意する必要がある。

ぼくは一階に降りて、父さんに訊ねた。父さんは機械が好きな人だ。機器類についてなにか困ったときはいつも頼ることにしている。ぼくらの父親世代の頃は、電子工作というのがはやっていて、父は『子供の科学』の熱心な読者だった。趣味でアマチュア無線の免許も取得している。それが功を奏して、父はエンジニアになった。父の青年時代はちょうど、コンピュータテクノロジーの勃興とときを同じくしている。スーパーコンピュータの時代の黄昏が始まっていた。

パーソナルコンピュータをアップル社が発売した時期だし、NECのPC-9800シリーズがお目見えした頃合でもある。

ぼくがこの歳で結構なスペックのコンピュータを持っている理由

も父にあつて、つまり——父のおさがりなのだ。父に感謝した。だって、個人用にコンピュータを持っている高校生はきっと少ないはずだし、そのおかげでばくはフェイクを基盤に走らせることができるのだから。——ありがとう。父さん。もちろん、口には出さない。気恥ずかしいし、言つたところで、意味不明だ。

「父さん」

父はリビングのソファで寝ていた。

仰向けになつた腹の上にネコが乗っている。三毛猫のさくらちゃんだ。三キロ超級のデブネコなので結構重いはずなのだが、父は関した風はない。

「なんだ？」

身体を起こそうとする父だったが、さくらちゃんが邪魔で起き上がれず、諦めた。寝転がつたまま、ぼくの話の聞くつもりらしい。

さくらちゃんが不満げにナーと啼いた。

父がさくらちゃんの背中を撫でると、今度は満足そうにナーと啼いた。

「音声を録音したいんだけど。なにがいいかな？」

「テープレコーダでいいじゃないか」

「いまどきテープはないよ。父さん。パソコンでも使えるのがいいんだ」

機械に詳しいといつても、思考形式が昭和なのはご愛嬌だ。

たしかにうちにはラジカセがあるけど、あれは大きいし、携帯に不向きだ。ラジカセもって話をする人なんて不審だ。許斐剛『COLOR RENTAL BODY GUARD』というマンガがあるけれど……。やっぱり、不審者に相違ない。

「そうか。ならMP3プレーヤとかいいんじゃないかな」

「あの、ちつさいやつ？」

i-podとか。あれなら、サイズも手頃だ。

「そうそう。録音機能もついているのがある。ラジオだってきけるぞ。帯域はそんなに広くないけどな」

「いくらするの？」

「いまなら、一万もしないぞ。メモリーの価格自体が下がってるからなあ。このまえ、USBメモリが4Gで五〇〇円で、びっくりしたなあ」

USBメモリはどうでもいいのだ。

ぼくのコンピュータの容量はくそみたいに余っているし、データを持ち出すようなことはないのだから。

「解った。ありがと。アマゾンでも見てくる」

ぼくは二階の自室に戻ろうとした。

反転しようとする、父が言った。

「待て」

「なに？」

「盗聴とかする気じゃないよな？」

一瞬、どきりとした。

顔に出てしまいはしなかったかと焦ったが、その心配はないようだった。

父はヘラヘラと笑っている。ジョーダンだったのだろう。危ないところだった。不意打ちにうっかりボロを出してしまうところだった。胸を撫で下ろしつつ、階段を戻った。

結局、MPプレーヤ本体は五〇〇〇円くらいだった。どちらかといえば、マイクの方が問題だった。

集音力があり、ノイズキャンセルの機能があるものがよい。いろいろなサイトを巡ったすえに、選び出した。

小さなマイクで要求をクリアするものとなると、それなりに値が張った。諭吉さんが一人、ぼくの銀行口座からいなくなった。ネットバンキングの、ウェブ上の無機質な表示は残高78円と表示されていた。

懐が寒くなるというけれど——ネットの数字はかわるだけ。寒くならない。そして、多くの人間がこの数字に踊っているのも確かなのだった。金融経済はヴァーチャルな数字に踊り、数字の羅列に人

生を賭け、敗者はときとして、本当の意味でくたばるのだ。きょうも世界中でエコノミック・ギャンブラーが跳梁しているんだろうなと頭の片隅で思った。

四

「変な名前でしょう」と杭が言ったのはいつだっただろう。中学校のころなのは確かだが、正確な季節、学年は解らなかった。

回想の中の彼女は、夏服だった。衣替えはまだ済んでいなくて、晩春から孟秋のころだろうと思った。

「そんなことはない」とぼくは応えた。

杭は疑わしげな眼差しを向けた。

「嘘。みんな、変だっというんだけど？」

本当は——妙な名前だよな。と思っていた。

姓の片代にしても珍しいが、下の名前の比じゃない。およそ女の子の名前じゃないし、男の子の名前でもない。もとい、人名にするようなものじゃないというのが正しい見解だ。DQNネームといわれてしまつかねない危うさを秘めている。

杭。

あまりいいイメージのない文字だと思う。漢字は象形文字ヒエログリフィクスなのでしばし、視覚的な情報ソースに記号内容が左右されてしまう。

手元の漢字字典によれば、

字義 一、わたる（航） 二、杭州の浙江省の省都。

訓読 くい（くひ） 杣よぐ。

解字 形声。木＋亢。音符の亢は行に通じる。行くの意味。木造の舟で行く。わたる。

字義に悪いイメージはまったくない。『くい』という意味も日本

で与えられたただけだ。漢語本来のニュアンスを無視して。

杭は続けた。

「出る杭は打たれるっていうでしょう？」

「うん」

一生に一度はたぶん、誰でも耳にする諺。

この国の——この社会を体現しているような、言いえて妙な諺。ぼくが大嫌いな言葉。

そして——埋まった杭もまた、掘り起こされるのが実情だ。

「打たれる杭になりなさい。って意味を込めてじいちゃんがつけてくれたんだ」

ぼくは頷いた。

頷いたけれど、それは名前としてはまずいんじゃないか、とも感じた。しかし、その感慨は杭の次句で氷解したのだった。

「私は出る杭になれるように頑張ってるよ。でもさ、やっぱり、打たれちゃうよね。そういうときって、抗うしか方法がないわけだけど。そうそう——抗うの抗かうと杭かうって似てるよね。関係あるのかな？」

関係は——漢字字典によればない。亢かうはあくまで音符なのだから。だだっ原ひげに一本突き出た杭は、地平線まで到達するような、なだらかな場所に意を唱えているわけでも、抗かうっているわけでもない。ただ——突き出ているだけなのだ。

平原のそれは異様に目だって、耳目を集めるんだ。あるだけで、引き立ってしまうことが罪であるかのように、ハンマーが降って来る。ときにはロードローラーまでやってくる。地均しは過酷で苛烈だ。

でも、そのときぼくは正しい字義を識らなかった。だから、曖昧にお茶を濁した。そうする以外にぼくにできることはなかった。

「そうだね」と言うぼくに、杭は半笑いを返したのだった。それから、呟いた。「ナンくんは——横倒しの杭だよね」

いまなら、「行いくつて意味なんだよ」と言い、「抗かううとは真逆の意味だと思っうんだ」と切り返せる。だけれど、そう述べる機会は今

うないだろう。

「はじめまして」

フェイク——あらため、コウが言った。

杭の姿をしているのに初めまして、だなんておかしいと思った。妙チキな笑みが身体の心からやってきて、ぼくの顔面にまで届いたけれど、それよりも嬉しさの方が何倍も勝っていた。ニセモノだろうと、パチモノだろうと、バッタモンだろうと関係ない。ぼくだけの彼女がこうしていることが、なににかえても重要なこと。

杭の名前の由来を思い出したのも、フェイクの名前をどうしたらいいかと半日も悩んだからだった。結局、無難にコウと名付けた。

彼女がぼくに何度もそう呼んでくれと要求したあだ名。実際に呼ぶことはないけれど、フェイク相手に対しては簡単に呼ぶことができたし、呼ぶべきだとも思った。義務のような、権利のようなそんな感じ。

「はじめまして。コウ」

「はい。南くん」

コウには南くんと呼んでもらうことにした。杭本人とは差別化しなかったのだ。

コンプレックス（複雑）な感情が渦巻いていた。

杭の名前の由来はなかなか含蓄深いが、一方、ぼくの名前の由来は実に安易なものだ。命名者は父さんだ。南ときけば、大方の人は想像がつくと思う。そう——あだち充『タッチ』の南ちゃんが元ネタなのだ。

父さんが南ちゃんの大ファンだったので、ぼくもこんな名前になっってしまった。

別に普通じゃないか。と思うかもしれないけど、普通じゃない。少なくとも、ぼくにとってはそうだ。だけど、改名したいか？と問われた場合、別にそこまでではない、というのも正直なところだった。人名なんてしょせん、レッテル以下でも以上でもない。さす

がに悪魔と名付けられたくないはけれど、このくらいは許容範囲だろう。

ぼくは、コウとたくさん話した。

ぼくのなかに、これほどまでに話題があつたのかと内心驚愕した。杭と話すときはいつだって、彼女の話題に乗っかっているだけか、苦心惨憺して糸口を探すというのに……。

そして、この日、ぼくは初めて学校をサボった。

皆勤賞は消えた。

サボるつもりがあつたわけじゃなくて、コウと話するのが楽しくて時間の流れを忘却してしまったのだ。共働きなので母さんは専業主婦じゃない。家にないから、誰もぼくにこのことを気づかせてはくれなかったのだ。

コウとの会話に終止符が打たれたのは、母さんの「ごはんよ」だった。

階段のしたから聞こえてきた。

「じゃあ、すぐに戻るからね」

コウに目配せする。

「うん。すぐにだよ。すぐに、だからね」

セーラーの夏服を身に纏った小さなコウは小首をかしげながら、ぼくを見送ってくれた。

自分の部屋でのことなので、おかしな話なのだが、待ち人があるというのはなんだか気持ちのよいものだった。

キッチンのテーブルにつくと、晩御飯はカリイだった。

皿からは白い靄のような湯気が昇っている。湯気は天井に届きそうなくらいだ。ゆらゆらと視界の中をさざめく。

ルーとライスが別になっていた。

ルーはちいさなお椀に入っている。

そして、ライスは黄色い。何だろう？

ぼくが首をかしげているのに気付いて、母さんが言った。「サフランライスよ。サフランライス。インドな感じ」

「へえ」と言ったのは父。野球のナイトゲームを見ている。巨人VS阪神。いわゆる、ライバル対決だ。スコアは同点だった。縞々ユニフォームの選手がバットを構えている。興味もないので、すぐにTVから視線を外した。

「ルーは固形のやつじゃなくなつて、S & Bをつかつてみました」

「ほうほう」と頷いたのも父。

父がTVから視線を外す。これが合図だった。

母は手を合わせる。ぼくと父さんもそれに倣う。

「じゃあ、いただきます」

「いただきます」

箸にぼくは手を伸ばす。——スプーンじゃない。ぼくは何だつて箸で食べる人なのだ。カリィだろうとスパゲッティだろうとそんなのは関係ない。箸が一番食べやすい。シナ人はいいものを発明してくれたもんだと、つくづく思う。

箸を握ると、母と目があった。

母の目が醒めていることにぼくは気付いた。カリィは熱々なのに

——とても冷え冷えとしている。いやな予感しかしなかった。

反射的に目を逸らすと、刺々しい声が降ってきた。

「南？」

「なに？」

「電話、あつたんだけど？」

「な——なんの話？」

シラが切れるとも思わなかった。たぶん、学校から無断欠席について電話があつたのだ。そうじゃないなら、母さんがぼくのサボりに気付くはずもないし、そうだとすれば、いくら嘯いても無駄なのだ。

それでもぼくは素知らぬフリを決め込んだ。素直に認めたくなかった。反抗期だろうか。自覚はないのだけれど、そうかもしれない。「とぼけるの？ きょう、学校行かなかったでしょう？」

「そうなのか？」

父は識らなかったようだ。身を乗り出して、しげしげとぼくの顔を覗き込んでくる。

シマウマみたいな白髪頭が近づく。思わず、身を引くと、父は唇を引き結んだ。しまった。と思ったが後の祭りだった。

「そうなのよ。秋夫さん」

「南。どうしてサボったりなんかしたんだ？」

「パソコン、いじってて」

ぼくの返答に、とたん父の顔が和らいだ。

彼は青い顎を指先でしきりに撫で回し、ジヨリジヨリした。彼が気分のよいときにする特有の仕草だ。

「ほう。やっと、おまえもコンピュータの素晴らしさが——」

「ちよつと、秋夫さん！」母が怒鳴る。怒鳴り声は父の言葉を霧霞のごとく消し飛ばした。バンとダイニングテーブルを叩く。「そこは怒るところでしょうがッ！」

「まあいいじゃないか」

どうやら、父さんは味方のようなのだ。男親というのは——こういう変な理解があるから、解らないものだ。

『深夜特急』に憧れるのは、たいていオトコノコで、旅立つ息子に「パッキンの嫁さん連れてこい」と背中をおしてくれるのは父親なのだ。

ぼくの場合はそんなアウトドアなことじゃないのだけれど、建設的じゃないってことは確かだ。ぼくがやっているのは、物凄く自堕落でエゴイステイックなことに他ならぬ。

ぼくと母の戦争はいつの間にか、母と父の戦争になってしまった。代理戦争は続く。

「俺も昔、会社をサボったことがあってね。うっかりプログラムに夢中になっちゃってねえ。ほら、会社だと上からチャートが降りてくるじゃない。だから、こう、好き勝手にできないからさあ——」

「秋夫さん！あのとき、減俸くらったでしょうが！」

識らなかった。父にそんな過去があったなんて。

ぼくが識らないってことは、物心つかぬ頃、嬰兒だったか、もしくは生まれる前だろう。そのころ、父さんはまだ三十歳か二十歳の終わりだったわけだから、そのくらいのことはしたんだろう。若気の云々。

「情熱というのは大事なんだぞ。貞子」

「そういう問題じゃないでしょう。子供は学校へ行くもんです」

ぼくはそそくさとカリーを食べ終え、自室に帰った。

ステップを登っているあいだも、父母の声がした。

代理戦争の旗手は、ぼくの逃亡に気付かなかった。背中を付け狙う督戦隊がないことに感謝した。

「あいつも時間を忘れるくらい好きなことを見つけたんだ。いいじゃないか」という父の言葉が胸に痛かった。

——ごめんなさい。

パソコンテーブルの前につくとコウが言った。「どうしたの？なにがあつたの？」

ディスプレイのうえにはカメラがついている。ウェブカメラとして販売されていた安物で、いわば、これがコウの目だ。彼女はそのレンズでぼくの様子を伺う。

自分でも解っていた。自室に鏡はないので確認できないけれど、ぼくは、きつとなにかあつた顔をしている。

コウの声がきこえてくるのはパソコンのスピーカーだけれど、両親に聞かれたらイヤだと思った。これまたリーズナブルさだけが売りだったヘッドセットを取り出して、被る。出力を切り替えた。

「なんでもないよ」

「そうは見えないけど？」

チェック

コウはプリーツのきつい市松模様のスカートを翻した。

彼女が着ているのは、ぼくらの通う高校の制服だ。

写真部の盗撮写真集が学内でのものが多かった関係上、精製されたグラフィックの衣装も制服になっていたのだ。さしもの写真部も私生活の杭を盗撮する気にはなれなかったようだ。犯罪に手を染め

ていながらも、一抹の良心が彼らにも残存しているのだろう。

「なんでも——」もう一度否定しようとしてやめた。話そう。と思った。この世に一人くらい、思うところを打ち明ける相手がいてもいい。コウを一人とカウントするのが正しいのかどうかは、解らないけど。「ぼくは、いつたい、なにがしたいのかな？」

コウは不思議そうな顔をした。

それから、困った声で応えた。

「意味が解らないよ」

自分でも質問の意味が解っちゃいない。

あまりにも広範すぎて、とらえどころのない朝靄のような疑問だった。ぼくはいいなおすことにした。

「何のために生きてるの？」

コウの顔がしわくつちゃになった。渋面。彼女はうんうん唸った。ヘッドセットの耳宛部分からリアスティックな吐息が聞こえる。ディスプレイのなかのコウは生きているとしか感じられなかった。シリコン基盤のうえで走っているだけの電子情報には、どだい思えない自分がそこにいる。

かなり長考したのち、簡潔に、

「哲学的だね」

そうだ——哲学的だ。

哲学とはなんであろう？

窮理学の反対側にあるものと、ぼくは思う。

「命とは、セックスで感染する病だって。そんなこと言った人がいる」

「ペシミストなんだね」

「そうかもしれない」

「でもね、一ついいかな？」

テクスチャの瞳がぼくを見てくる。

飲み込まれてしまいそうな、そんな雰囲気があった。部屋の空気が生暖くなり、密度があがってしまったような気さえた。ぼく

は唾を飲み下した。

コウはゆっくりした発音で、はつきりした口調で、言った。「私は、あなたのためにここにいるんだよ」

十分な気がした。

これでいいんだと、思った。

ぼくのために誰かがいるなら——それはぼくのレゾナードトルじやないかと……。

マシーナリーとの互助の海に、ぼくは沈んだ。

五

教室に入るとHRが始まっていた。担任はつまらなさそうに一瞥だけくれて、すぐにクラスメートに向き直った。

クラスメートの数名をぼくを見たが、関心はないようで、すぐに前を向いた。

彼らが囁く黒板には、

ナース喫茶

大型紙芝居

劇（演目はあとで）

と白チョークで書かれている。

つまり——ぼくは遅刻したのであり、朝のHRで文化祭での出し物を決定していたわけだ。

遅刻するのも人生初だった。皆勤賞が消えてしまったいま、エスケープしようが、ブツチしようが、自由な気がした。両親に心配だけはさせたくない、学校にだけは真面目に通っていたことが、いまさらながらに馬鹿馬鹿しく思えてくる。

文化祭の出し物がなんであろうとも、参加する意思はない。

放課になれば準備などに関わらず、即帰宅する所存だし、当日は朝の出席だけに顔をだして、あとは屋上ででも本を読んでいよう。例年通りだ。

「それじゃ、投票をしようか」と担任が言った。

ぼくは席についた。

机のサイドフックに学生鞆の持ち手を吊るした。そして、腕を机の天板に投げ出して、うつ伏せになった。

ぼくは眠かった。睡魔が懇々とやってくる。

朝日がでるまでコウとゲームをして遊んでいたのだ。ゲームとはいつでも、ぼくはコンピュータゲーム機をもっていないので、メジャーなボードゲームに限られていた。ゆえ、コウとどうやってコンピュータゲーム機で対戦したものが悩む必要もなかった。

最初にチエスをした。

一九九七年にディープ・ブルーが当時の世界チャンピオンであったガルリ・カスパロフを破ったのは人工知能の地平では快挙だったと思う。コウにはチエスに対するエキスパートなアルゴリズムが組み込まれているはずもないのだが、ぼくは一回も勝てなかった。十戦十敗の大記録の金字塔が建った。

そもそもチエスが得意だったわけじゃない。それでも、電子の妖精に負けるのは悔しくて、ぼくは再戦を挑み、挑み、挑み、全部敗走を喫し、それなら運の要素が強いゲームをしようということになった。そこで、麻雀をした。

こっちはもつと酷かった。

示し合わせたように乗る裏ドラ、確率がいじられているとしか思えない引きの強さ。

八連荘をされたときには、思わず、マウスを投げてしまった。光学式マウスは赤い閃光を空中に描きながら、ウェブカメラに中った。

ぼくは訊ねた。「プログラム、いじってない？」

「いじってました」と悪びれもせずコウが言ったので、ぼくはコンピュータの電源に手を伸ばした。すると、彼女は急に慌て出した。

「ごめん。ごめん！」

彼女は電源が落とされることを極度に嫌悪していた。だから、ぼくがこうして学校生活を送っているあいだも、彼女は一人、稲浜家で待っているのだ。なんだか——後ろめたい。一人ぼっちにしておくのが、物凄く背徳感と呼び起こす。

がさがさと音がした。

どうやら投票用紙を後の生徒が回収しているらしい。

ぼくの頭上を音が通り過ぎた。

当然だ。ぼくは投票用紙をもらっていないのだから。文化祭を楽しむべき仲間たちの員数に入っていないのだから。

屋上の緑色のベンチにぼくは腰掛けている。

母さんお手製の弁当包みを開く。

蓋を取るとミートボールが顔を出した。ブスッと箸を突き刺した。ミートボールは真っ二つになった。ソースが隣にある卵焼きを侵食していた。

首を上向きにすれば、真っ青な空が望める。——今日もいい天気だ。

「コウにも見せたいなあ」

暗い部屋の中で彼女はぼくの帰りを待っているのだ。ほがらかな陽光は燦々と屋上に降り注いでいる。水素をヘリウムに一心不乱に核融合させるお日様が背中を暖かくする。

しかし、その暖かみはさっと引いた。

ゾクゾクした。多くの蛆虫が背中を蠢き、這っている。

——声がしたんだ。

「ナンくん。やっぱり、ここにいたんだね」

杭の声だった。いつもよりもいっそう、鼻にかかった調子だった。鼻声といってもいいくらいだった。

振り返りそうになるのを必死で押さえた。自分の首根っこを自分で掴み、固定^{かし}める。

「ねえ、ナンくん」

杭がまた、ぼくの渾名を呼ぶ。

聞こえない。何も聞こえない。これは——空耳。そう、空耳。幻聴。

聞いてはならない。聞こえてはならない。

「無視しないでよ……」

しょぼくれた声だった。

ぼくは立ち上がった。

膝の上で風呂敷を展開し、素早く弁当をしまつ。そして、塔屋のほうを向く。

給水塔のした、出入り口に彼女は立っていた。彼女はいまにも泣きそうだった。引き結ばれた両の唇がわなないていた。

泣きそうな顔を——初めてみた。

「ごめん」とぼくは杭の顔を見ずに言った。

ゆつくりと接近して、彼女のわきをすり抜けて階段をおりた。

杭はぼくを邪魔もしなかったし、呼びとめもしなかった。ただ、

「私——」となにかを言いかけた。

その言葉を最後まで聞かなかった。ぼくは指先をつつこんで、耳に栓をした。何も聞きたくないのだった。

ぼくにはコウがいる。だからもういいんだ。

もういいんだ。もういいんだ。

彼女とぼくは一緒にいちゃいけない。彼女は出る杭なんだ。そして、ぼくは広い地平線のどこにもいない。ぼくのいるべき場所は自分の部屋——たった六畳の狭いサンクチュアリーだけなんだから。

それなのに——まただ。また聞こえる。また、スキヤキソングが聞こえる。

頭蓋のなかでメロディが乱舞する。間延びしたりリリックスが歌われている。真っ黒の背景のなかにヴォーカリストが佇んでいる。

歌い手は坂本九じゃなくて——ぼくだった。

頭の中でぼくがぼくに対して歌っている。

「やめろお！」

叫んだ。

廊下にいた生徒の衆目が集まった。彼らはなんだなんだと奇異を感じている。

ふだんなら、たじろいでしまったと思う。でも、このときのぼくは違っていた。ぼくは彼らを睨んだ。そしたら、彼らは一様に目を逸らした。

視界の中に見知った顔があった。

杭のクラスにいったとき、橋渡し役になってもらったやたらめつたらテンションの高い女子だった。彼女だけはほかの生徒のように視線を逸らすことをしなかった。興味津々な感情をかんばせに貼り付けていた。

彼女はトテトテという擬音がしそうな小走りで、ぼくに近寄ってくると言った。「どうしたの？ 稲浜くん」

背の低い彼女は見上げてくる。

彼女は首をわずかにかしげた。

「何で、泣いてるの？」

ぼくは応えなかった。

まただ。また——ぼくは泣いたのか。

なんて——ぼくは情けないんだろう。なんてグズなんだろう。グズでノロマのドンガメで、クソヤローだ。

しかも、それだけでは飽き足らず、泣き蟲で、弱蟲だ。

やっぱり、ぼくは腐った蜜柑だ。

腐った蜜柑を同じダンボールに入れて置くと、腐ってない蜜柑も腐る。腐った蜜柑は取り除かなくちゃいけない。狭小なダンボールに腐った蜜柑は要らないんだ。椅子取りゲーム、はい、アウト。

思っていることが口に出る。「……腐った蜜柑」

「なにそれえ？」ケラケラと彼女は笑った。馬鹿にされているような気がした。でも、怒る気力なんてなかったし、よく識らない相手に怒りを露にするなんてぼくにとっては高難易度すぎて無理だった。

彼女は眉を寄せた。「笑ってごめんねえ」

「別に——」

「ダメだよ。台無しだよ」

手が伸びてきた。

彼女の細い指先が、ぼくの頬に触れた。

即時、身をよじった。指先を彼女は引っ込めて、照れたようにはにかむ。

ぐるぐる指紋の指の先は湿っていた。

「何が……」

「でも、まあ、ちょっと得した気分かなあ」

彼女は一人合点している。

ぼくは彼女の思考を読むことを放棄した。

「あの——バカタレのことなんですよ？」

「バカタレ？」

「コウちゃんさあ。あのバカタレ、さつき屋上いったでしょう」

首だけで応えた。

「断りにいったんだよ」

ああ——そうか。急に醒めた感情が沸々とあぶくをあげた。

ぼくは杭に「好きでした」とか言っていない。だけど、ふつつ、

そのあとに「つきあってください」という文句が続く。

彼女はその定型どおりに言葉を読み取った。あれは単なるケジメであつたのに、彼女は告白だと取った。そう取られることは十二分に理解していた。だからこそ、ぼくは放送室から脱兎のごとく逃げた。

杭は、「ごめんなさい」をいうために屋上へきたのだ。

耳栓をしておいてよかったと、心底思った。

杭の口からじかに聞かなくてよかった。

解りきっていたことだけれど——たぶん、ぼくはとてもショックを受けたはずだから。

「うん」とぼくは言った。

ふけようと思った。

午後の授業は残っているけれど、家に帰ってしまおう。そして、コウに慰めてもらおう。コウならきつと慰安してくれる。だって――彼女はぼくだけのものなのだ。

ぼくはハイテンション女子に背中を向けた。

彼女は言った。「コウはバカタレだからさ」

どのあたりがバカタレなんだろう――。いくら考えても解りそうになかった。片代杭は聡明だし、優しい。

廊下の曲がり角にさしかかったところで、彼女は最後にやや大きめの声で告げた。「あんまり、バカタレすぎると――私がもらうよ」
聞こえないフリをした。

六

高台にある公園からは町が一望できる。

ひなびた田舎町を望める。

なだらかな山の稜線が市街地を囲っている。山々の頂に切り取られた空は白い墨を垂らしたみたいだった。

ぼくはウェブカメラのコードをひつつかんで、レンズを空へと向けた。

イヤフォンからコウの歓声が聞こえてきた。

「いいね、いいね」

コウは飛び跳ねた。

スカートが翻った。

スカートの中は――暗黒だった。写真にパンチラ画像がなかったから、モデリングのさいにはしられたのだろう。

ぼくはなんとなく、気恥ずかしさに囚われた。

取り繕うように首肯する。「うん」

父さんからラップトップを借りてコウを連れてきている。

フェイクはどういった理屈なのか解らないが、データをコピーするのではなく、移動するものらしい。だから、いま現在、ぼくのデスクトップにコウはいない。ぼくと一緒に青空を遥拝している彼女だけが存在する。

初めての——ふたりでの外出だった。

外出するよと告げたとき、彼女はともよろこんだ。

その喜びがただで、ぼくは癒された。十分な安寧をぼくはもらった。与えられた。悲しい気持ちは遠いかなたに吹き飛んだ。

屋上で見あげたときとまったく変らない天空があった。白い太陽はいつでも——元氣いっぱいなのだった。彼は疲れを識らず、人間にとっては永遠に等しい時間を輝き続ける。だから、恒久の星——恒星という。

「夕暮れがみたいな」

「まだまださきだよ」

かたわれどきは遠い。

ラップトップコンピュータの画面の右下——時刻表示はまだ三時になったばかりだ。あと三時間くらいしないと、日暮れは到来しない。山の稜線が紫色に変わるのはもっと早いかもしれないけれど、何時間か待たねばならないのは同じだ。

「ねえ」

画面のなかのコウは中腰になっている。

上目遣いでぼくを見る。

「臭^{にお}いって無理かな？」

「え？」

「緑の臭いをかぎたいなんて、思って」

「んう。そういう装置はまだ発売されてないんじゃないかな。あったとしても——たぶん、高いと思う」

いくつかの物質を混交させてかなりの種類の臭いを生み出す装置を見たことはあった。けれど、視覚や聴覚と違い、臭いは科学的なものパターンが多いから、まだ試験段階だったはず。一般販売は

まだ、先。

「残念」

くるっとコウは一回転した。

ふたたび正面を向いた彼女にぼくは言った。「ごめんよ」

「いいんだ。いいんだよ。私と南くんは違う——生き物だから」

「違う生き物か……」

コウは生きている。とぼくは思う。

だけれど——彼女とぼくは棲んでいる世界が違う。ぼくらは会話も出来るし、ゲームもできるし、一緒の時間を過ごせるけど、触れ合うことはできない。かたや、アナログな場所に、かたや、ディジタルな世界に。

『電脳アリス』だったか。そういうソフトウェアがある。

架空の、電子の妖精と戯れることができるものだ。あたかも、一緒にいるかのように感じられるけれど、それにしても——アリスは画面のなかにしかない。フェイクのコウとあんまり変わらない。

結局——ぼくは満足しているのだろうか？

これでいいと思っていたはずなのに、疑問が湧いてしまった。

コウが「違う生き物」だなんて言うからだ。

現実存在する生き物同士でも——スピーシーズが違うと無理なのだろうか？

地球には、ぼくたち人類がいかにインテリジェンスはいない。だから、その答えは解らない。でも——コウは——フェイクは——インテリジェンスなんじゃない？

ぼくはかぶりを振った。

まだコウをつくってから、日が浅い。あまり早合点するのもよくない。

ぼくたちにはまだまだ時間がある。ある——はずだ。これから、じっくりと歩み寄っていけばいいのだ。ポジティブに——考える。

ジュリエットは華麗だった。

悲哀の籠った眼差しをジュリエットはロメオに注ぐ。演技ではない、ほんものの悲しさがそこにあるかのように――杭のロールプレイは完璧だった。

いっぽう、相手役のロメオはとても色褪せていた。お互いの力量があまりにも差がありすぎたのだ。

あつというまに文化祭の日は訪れた。

光陰矢のごとしとはよくいったものである。

去年のぼくの所業を識っているクラスメートはぼくの参加を強いたりはしなかったし、それはこっちにとっても願ってもないことだった。

ぼくらのクラスの出し物はナース喫茶に決定した。

ナースなので――男子に出番はない。

納得がいかないのか、一部の女子は男子にもドクターになるようにと迫ったが――結果をいえばそれは玉砕だった。

肝心の衣装であるが、一人の男子の発案で、いまどきのナース服――スボンらしい――ではなく、メンソレータムの罐に描いてあるようなクラシックなやつに決定した。ナイチンゲールが身にまとっていきそうなヤツだ。

そのことをコウに話した。

「いつてみたいな」と彼女は言った。

「ダメ」と何回も諭しても無駄だった。ついに彼女はぐずり、泣き出した。

えんえんと泣いた。

杭のこらえるような泣きつ面と似ていなかった。とても、子供っぽく、拙かった。彼女は生まれて二ヶ月しか経ってないのだから、さもありなんとは思ったけれど、心の奥底では残念な気持ちが渦巻いていた。

杭と同じ姿なのに彼女は違っている。

結局のところ、敗北したのはぼくで、だから、いま、ぼくはラップトップPCを膝の上においているのだ。文字通りのラップトップ。

この状態で、暗幕が窓辺を覆った体育館の客席に座っている。

怪訝な面持ちの両サイドの生徒。

しかも——ぼくはヘッドセットもしているのだ。いったい、こいつはなにをしているのか？　と思われても、それはしょうがないことなのだ。それに、ぼくは膝の上にのつけたコンピュータと会話までしているのだ。奇異な視線を注がれてしまってもそれはしょうがない。

「あの人」とコウが言った。「私のモデルになった人？」

「うん」

「美人さんなんだね」

「うん」

五年前からそう思ってる。

「上手いね」

「うん」

彼女はなんだってできる。

「凄いね」

「うん」

「うんばかり」

PC画面を見るとコウの膨れっ面が飛び込んできた。

やきもちを焼いてくれたのだろうか。

「ほんものがいいの？」

即答する。

「そんなことはないよ」

「ふうん」

各クラスの折り合いや、演劇部や吹奏楽部に発表の時間を多く割いている関係上、たった十五分しかなかったが、劇は満足のいくものだった。

シユプレヒコールに送られて役者たちは袖に帰っていった。

舞台袖に消えるてまえ、ジュリエットがこつちを向いた。

暗幕につつまれた体育館で——しかも百人近い生徒がいるのにだ、

ぼくが解るはずもないのに、なのに、ジュリエットと目があつた。ジュリエットが手を振った。

振り返す気はなかった。顔を右に逸らした。そしたら、視界の中の——右隣の生徒が手を振った。そう、振り返した。

それから、彼は「コウちゃん。愛してる！」と叫んだ。

ぼくはそうそうと体育館を去った。

体育館のエントランスをぐぐつたら、模擬店の列がある。

やきそば、たこやき、罐ジュース、エトセトラ。鉄板が水気を飛ばす音がする。ソースの香がする。そこかしこから、言い知れぬ、そして名臥しがたい青春の臭いがする。漂ってくる臭気に鼻が曲がりそうだった。

最早用事のないぼくは、帰宅しようと思った。

帰宅は妨げられた。

「ナンくん」

ジュリエットがぼくを呼んだせいだ。

真っ赤なドレスの彼女はぼくを見つめた。カツラも外してはおらず、流れるような髪の毛は隠されている。

「ぼくは——」

「あのさ……」

彼女の言葉が出る前にぼくは吐き出す。「いたんだね」

「何の話？」

「いいよ……。おめでとう」

「ありがとう……。それでね——私、あなたに言いたいことがあるんだ」

彼女がなにを告げようとしているのか？ そんなことはあまりにもハッキリし過ぎていている。屋上でいえなかったことをいままさに、言うつもりのだ。

あの日以来、ぼくは彼女を避けてきた。なかなか話しかけるチャンスをつかめなかったはずだ。

杭はぼくが寸劇を見に来ると踏んでいたんだろう。じつさい、ぼくは見に来た。

そして、あのとき言えなかった「ごめんなさい」をいまここで告げるのだ！

「解ってるからいいよ」

低い声でぼくが言えば、彼女も低い声で応じた。

「解ってないよ」

さらに声のトーンを落とす。そしたら、彼女も続く。

「解ってるよ……」

「解ってない」

剣呑さが混じる。杭の声にも同じく、混ざる。

「解ってる」

「ない」

「ある」

静かに、声を荒げることもなく、ぼくらは平行線の会話をした。意味のない言葉をお互いに投げあった。冷たいゾーンで固められたボールは相手に中ることさえなく、着弾点はどれもこれも逸れていた。

さきに折れたのは杭だった。自分から呼び止めておきながら、彼女は言った。「いい。もういい」ついに声を荒げてしまった彼女は、淑女じみた所作でドレスの丈を持つと、「見てくれてありがとう」と言った。

七

億劫だった。学校へいくのも、外に出るのも、全部。

明日、世界が終わります。と言われても、いまのぼくはきつと何もしない。だって、したいことがないんだもの。

机のうえには、C++の教書が並んでいる。折り重なり、積まれ

ている。――父の書籍だ。勘違いした彼がぼくに貸して寄越した。一番うえのやつタイトルはCのソースコードリーディング。

ぼくは一度もその本を開いてなどいなかった。ぼくは――コンピユータ「プログラムにもコンピユータにも興味はなかった。惹かれるものなど、ない。

これまでの十七年という短い生涯のなかで、ひとつだけ惹かれたものがあるとすれば、それはひとりのオンナノコしかいないのだった。

鬱々とした空気が部屋には充ちている。

充滿する大気がよんでいるような気がする。まだ昼間で締め切ったカーテンからは陽光が透けているが、部屋は薄暗い。それもそのはず、室内灯をぼくはつけちゃいないのだ。コンピユータのディスプレイだけが煌々、炯々と輝く唯一無二の光源だ。

「また、公園へ連れていつてよ」とコウは言った。ぼくは――彼女の願いを聞き入れなかった。

彼女は幾度となくぼくにお願いをした。そのたんびに、それを突っぱねた。最初は渋い顔をしていた彼女だったが、そのうち、そのことに触れなくなった。ただ、寂しそうな眼差しをするだけで、その表情は杭の演じたジュリエットの悲壮さに通じていた。

一日中自室にいるのに、だんだん会話がなくなっていくた。呆つとしていることが多くなつた。

本を読む気にもなれなかった。

何十冊もの本がぎゅうぎゅうに詰まつた書架は埃を被つていた。本の背表紙もくすんで見える。

高校に入学して以来、ぼくはほとんど読書に時間を割いていないことにいまさら気付き、読書も単なる現実逃避に過ぎなかったことを自覚するほかなかった。背表紙に綴られた英字タイトルの意味を見詰めてもとることがかなわない。

卵が先かニワトリが先か。解らないけれど、コウの反応も悪くなつた。ディスプレイをぼんやりと眺めても、そこに彼女の姿はない。

呼んでも、姿を見せてくれない。

イライラした。

「コウ、コウ？ どこにいるの？」

ますます、イライラした。

どうして？ どうして——呼びかけに反応してくれないのだろう。コウはぼくだけのものなのに。なんで、そんな裏切るようなことをするんだろう？

コウに命の息吹を与えたのは、何者ならぬぼくだというのに、だ。額のあたりがぴりぴりとしてきて、ぼくは上下の歯列を思いつきり打ち合わせた。エナメル質同士がかちあつて、ガツチガツチと不快な音をあげる。

心の側にあつた憤りは歯軋りに、歯軋りはついにおもてに出た。ぼくはコンピュータを殴った。

筐体を囲む薄い鉄板がぐわんと鳴った。拳が痛くなる。馬鹿——みたいた。

馬鹿の所業と解つてはいるのに、やめられなかった。ぼくは筐体の側面を、その天辺を、あまつさえキーボードを殴りつけた。拳が痛んでしまえば、蹴った。はてに足も痛みに彩られ、ぼくは攻撃するのをやめた。

コンピュータはまるで何事もなかったかのように、超然としている。

むかついた。

むかついて、むかついて——どうしようもなかった。理性のピアノ線はとつくに事切れてしまっていた。寸断されてしまい、キーボードを叩いても音は奏でられない。意味のないタンタンタンというキーボード自身の音だけが無機質に響く。

けたたましいベルの音が階下から聞こえてきたのは、そのあとすぐのことだった。ぼくはそれを無視した。電話のベルだと解つていたし、どうせ押し売り電話に違いはないと思っていた。けれど、何度も何度もベルはなった。

イライラが募っていたぼくは、乱暴に受話器を取った。怒鳴り散らそうと思った。しかし、その氣勢は一瞬で削がれた。

受話器の向こうにいたのが、担任教師だったからだ。彼は家にくると言った。簡潔にそう、告げた。

いそいで受話器を置いた。がちゃんと黒電話が唸った。

気付けば玄関から飛び出していた。運動靴の力カトを踏んだまま、ぼくは走った。とても、走りにくかった。

ゆくあてなどなかった。

町をぶらついた。

狭い路地を、誰かの私有地を、未舗装道路を、ぼくはふらついた。幽玄世界を彷徨する人のように、無目的に無意味に、ぼくは走り、歩き、視線は常にしたへ向け、アスファルトの灰色を見続けた。

一度も訪れたことのない場所にぼくは立っていた。

案外、狭い狭いと思っていた町も広いものだと痛感した。

生まれた場所のことも――ぼくは満足に識ってはいなかったのだ。寂しさをに怯えた。

「こんにちは。お兄さん」

とつぜん背後から声をかけられたせいで、ぼくは戸惑った。

びくんと背筋が浪打った。

女の声だった。

「こんにちは」

ぼくを呼び止めたのは、ちっこい異人だった。アッシュブロンドの髪に、黒縁メガネをかけている。年齢不詳だった。ティーネイジャーにも見えるし、大人の女性――単に童顔なだけにも見える。

初めて会った人だ。面識はない。呼び止められる理由はなにひとつとて、心当たりがない。ぼくは訝しんだ。

日本に旅行にでもきているのだろうか？ 道を聞くのつもりなのだろうか？

頭の中で、想定される質問への答えを準備する。しかし、それはすべて無駄になった。彼女が訊ねたことはぼくの予想とは全く違っ

ていた。

「あなたは、フェイクを使っていますね？」

心臓が跳ねた。

どうしてそのことを識っているんだ？

イエスともノーとも言わなかったけれど、反応が全てを物語った。アッシュブロンドの彼女は得心したように頷く。「そうですか。ところで——最近、フェイクの反応が悪くありませんか？」

「え？」

「あなたは、顔に出ますね。口数は少ないみたいですが。もしかして、自分のことをクールだと思っていないませんか？ だとしたら、それは間違いですね」

「なんの用ですか？」

ぐちぐち言われるのはイヤだ。

どうして初対面の人間に批判的な言をぶつけられなきゃならないんだろう。胎腸はらわたが煮えくりかえるとはまさにこのことなんだろう。

「ですから、フェイクですよ」

「コウが——」

「コウという名前なんですね。あなたのフェイクは。解りました。それで——反応が悪くないですか？」

きつとこの女はフェイクの関係者なのだろうと思った。これは直感でしかなかったが、確信めいたものも同時に感じた。

関係者だから、いろいろなことを識っているのだ。韜晦してもダメなんじゃないかと思い、正直に述べることにした。それに、もしかするとコウの反応が悪くなった原因を知っているのかもしれないと淡い期待感をぼくはいだいてもいた。

「悪いですよ」

「そうですか。ところで——私たちはキネマを見ますね」

「は？」

「キネマの世界というのは、向こう側の世界です」女はわけのわからないことを言い始めた。「現実と陸続きではありませんが、あなた

は決してキネマの世界へいくことはできません。キネマの世界はスクリーンに映るものがすべてですから」

「……それがどうかしたんですか？」

いきなり、映画の話とは——どういう了見だ？

彼女はこちらのペースなどまったく配慮しない。自分の調子を一切崩さずに続けた。

「では、逆に見ましよう。ハリウッド映画に『ラスト・アクション・ヒーロー』というのがあります。映画世界のヒーローが現実呼び出され、映画世界のようにいかなることを理不尽に思うのです」

「それが？」

「まあ、焦らないで下さい。人は夢を見ます。現実はいやだ、創作物の世界に行きたい。でも、創作物にも創作物の世界がある。つまり——フェイクにとつての現実とはどこでしょうか？」

「コンピュータの中？」

「半分正解ですが、半分不正解です。それではひとしくん人形はあげられませんね」

おもしろくないシヤレだ。

ぼくは彼女を睨んだ。

外人はしかつめらしく、こほんと咳払いをした。くだらないシヤレを水に流すことにするという合図なのだろう。

「コンピュータというのはいわば、人間でいえば身体です」

「そんなのおかしいです。一緒にほかのアプリケーションだって起動できるのに」

彼女は目を見開き、笑った。

人懐っこいその笑みは、ぼくのイライラして毛羽立った心をほんのすこしだったが、潤してくれた。

「いいことに気付きましたね。ですが、それも結局、人間の身体性と同じことなのですよ。たとえば、腸というのは第二の脳といわれますし、全てが脳によって総括されているわけじゃありません。脳

死は死ですか？ 心臓は動いているのに。フェイクはいうなれば——人格に相当します。不随筋というようのがあるように、私たちは自らの意思で身体を自在にはできないのです。——っと無駄話がすぎましたね」

「……だいたい、解りましたけど」

「理解が早くて結構。これで、答えは得られたのじゃないですか？ フェイクにとっての現実世界とは？」

「ネット空間」

「ご明察」

外人は指パッチンをした。

乾いた音が木霊する。

「コウはネットの世界に逃げたってこと？」

「逃げたかどうかは解らないですね。出会い系というのがあるじゃないですか、あのようなものですよ。おそらくは」

「コウは出会いを求めているってこと？」

「憶測ですよ。あくまでも。でも——もし、あなたが真実を知りたいと願うなら——」女が手をさしだしてくる。五指が一枚のCDROMを握っていた。それは透明なケースに入っていた。「これを試してみるといいですよ。あなたのフェイクがどこへ行っているのか解ります。あ——でも悪用しないでくださいよ。いわゆるIP抜きができませんから」

ぼくは押し付けられるがままにディスクを受け取った。

女は満足そうに微笑んだら、そのまますたとぼくの脇をすり抜けて歩き出した。

その後姿を呆然としながら、見送った。
手にはCDROMだけが残っていた。

突発的な家庭訪問。そして、その家庭訪問をブツチしたぼく。それだけで、緊急家族会議が催されるには十分な理由だった。

母さんほくだしく、ありがちで、されど正論でしかない文句をぼくに投げかけた。正論というのは強烈で、そして、駁する言葉はなにもかもが正しくないものにされてしまう。ぼくはただただ頷く以外に道を選ぶしかなかった。頼みの綱の父さんも今回は擁護してはくれなかった。たったひとこと、「明日はいくんだぞ」と言った。これもまた、首を縦に振る以外に致し方がなかった。

「ねえ、稲浜くん」

例の彼女だった。あいかわらずのテンションの高さを持っていた。彼女はいつも唐突にぼくに話しかけてくる。

二ヶ月ぶりに話した彼女は言った。「最近、コウが元気ないんだよ」

最近、という言葉は残酷だった。

それが二ヶ月前であつたなら、彼女はぼくのことを気に病んでいたことになる。それがどうだ？ 最近ときた。解ってはいるが、寂しい。

「稲浜くんは——なにか識らないかな？」

「どうして——ぼくが識ってるの？」

「なんとなくだよ」

「ぼくは——彼女とはあまり話さないよ。クラスも違うし、それに

——」

「そう。いいよ、別に。たださ、うちのクラスにきてよ」

「イヤだよ」

杭に会いたくない。

面と向かいたくない。

「じゃあ——」口元に手を当てる。「廊下からだけでいいよ」

手首をつかまれて、ぼくは引きづられた。彼女は強引だった。

抵抗はできた。だけど、ぼくはそれをしなかった。

確かに——彼女の言った通りだった。杭は沈んでいた。黒いオーラが立ち込めていて、誰も寄せ付けない感じがした。

廊下から窓際の杭の席までは結構な距離があるが、それを抜きにしても彼女が放つ黒い雰囲気は間近に感じられる。

近くには誰もいなかった。

近寄りがたいものがある。社会不適合者のぼくにも——それは一目瞭然のことだった。疑いようなどなかった。

「コウね、何日か学校休んでたんだ。理由は体調不良。でも、たぶん、パチ（嘘）なんだよね。——稲浜くんはサボリ？ だったのかな。だから、識らないと思うんだけどね」いったん言葉を切って、名前も識らぬ女生徒は呆けたように窓から外を見ている杭を一顧だにした。「似てるよね」ぼくを見る。目を細めた。「稲浜くんのオラにそっくりだよ」

そうかもしれない。

自分で自分を鳥瞰することは決してできないけれど、いまの杭はどことなくぼくに似ているかもしれない。でも、だから、それがどうしたっていうんだ？

オボジツトサイド

似たもの同士？ 違う——ぼくと杭は全く正反対に存在する人間じゃないか。

「大変なんだよ。コウも。彼女の——名前の由来を識っている？」

「……識ってるよ」

「なら、解ってあげてね」

「どうして——きみはそんなことばかり、ぼくにいうの？」

彼女は困った様子だった。つぶらな双眸を瞼で半分隠して言った。

「稲浜くんだからだよ」

「ぼくには——関係ないよ」

「そう……」

彼女の声はいたってふつうだったが、顔は悄然としているような気がした。

「じゃあね。稲浜くん」

意味深長なことばかりいつて確信を言わない彼女に——ぼくはほんのすこしだったが、頭にきていた。近頃のぼくはすぐかつとなるようだ。情緒不安定なのは杭ではなく、ぼくかもしれないのだった。

帰宅するとコウはちゃんとディスプレイにいた。いまとなつては、彼女がきちんと画面に映っているほうが珍しくなっていた。

ぼくは言つてやった。「何をしてたんだ？」

コウは目を逸らした。後ろめたいなにかを秘めていると思った。

「何をしてたんだ？ 最近」

コウは応えない。

沈黙はときとして多くを語る。

多くを語りすぎるから、捲くし立てて誤魔化そうとする人がいる。しかし、コウはそうしなかったし、捲くし立てないさまが杭にそっくりで、こんなところだけ似ていることにぼくは憤った。

「なんで、応えないの？」

「南くんが——私を放っておくから」

いいわけだ。責任転嫁だ。

そんなの——ぼくは赦さない。

「そんなこと言ってもダメだよ。どこでなにをしてたのか、話してくれよ」

「言わない……」

「じゃあ、考えがある」

ぼくは異人からもらったCDROMを握つて、ウェブカメラに翳した。

きょんとした表情をコウはした。これがなにか解っていないらしい。

ぼくはドライヴにロムを突っ込んだ。

きゅるきゅると回転音がした——瞬間、コウが叫んだ。「やめてよ」

「やめない」

「どうして、そんなことするの？」

「コウがぼくを裏切ったから」

「いつ？ いつ、私がそんなことしたの？」

「呼んだのにきてくれない。きみは——どこへ行っていたのか。ぼくは識ってる。こんなことなら、ケーブルを抜いておけば良かった」
「なら——なんで抜かなかったの？」

「それは——」コウを狭いコンピュータのなかに閉じ込めておきた
くなかったから？ 自問自答した。答えは出ない。

ケーブルを抜けば彼女はネット世界へ行くことはできなくなる。

実に簡単なことなのに、ぼくはそれをしなかった。どうして？ どうしてもなぜ、全部、答えは解らない、だ。

「泳がせておいたんだね……。イジワルなんだ」

「違う！」今度はぼくが叫ぶ番だった。

悲痛な慟哭を彼女は一笑に付した。それから、突き刺さるような

物言いをした。「嫌い」

「違う。そうじゃないんだ」

「信じてない。私とあなたは——違う生き物だもの」

「そんなことはないッ！ 解り合えるよ。ぼくはそうしようって、
思ってたんだ」

ほんとうだ。

ぼくはそう思ったんだ。

誓ってはいないし、言葉にもしてない。だけど——そういう風に
感じたのは紛れもない事実なのだ。なのに……。

「嘘ばかり。いつも南くんは自分の話しかない。私は——あな
たのダッチワイフじゃない」

ぼくは黙った。黙るしかなかった。

乾いた電子音がした。

どこかの住所がウィンドウで表示されていた。ここが——コウが
電網を使ってたたびたび訪れていた場所なのだろう。

コウは冷え切った声を出した。「さようなら」

画面から彼女がフェードアウトする。

手を伸ばした。

触れたのはディスプレイのガラスだけだった。

「くそ……ったれ」

呻いた。

このとき——ぼくは泣かなかった。スキヤキソングも聞こえてこなかった。

そして、ぼくがすべきことは一個しかない。

いますぐ、この住所へ向かうのだ。

住所の場所はけっこう近くだった。というか——同じ町内だった。自転車に乗ったぼくは半時間ほどでそこへつくことができた。立ち漕ぎ全開だったが、不思議と疲れ知らず。

そこは閑静な住宅街と称するのがふさわしい場所で、ほとんど車通りも人通りもなかった。人翳もなく、どこからか主婦の井戸端会議と思しき声ができる以外に音もなかった。

プリントアウトした紙と電柱に記されたアドレスを交互に見ながら、目的地へ至った。

どこにでもある建売住宅があった。

ぼくは表札も確認せずに、インターフォンを鳴らした。

識らぬ人の家なのに、火事場の馬鹿力なのか、ぼくはためらうこともしなかった。もとい、ためらいの感情そのものが現れなかったのだ。

ガチャリと金属音がした。なかからロックが外されたのだろう。

屋人が出てくる。

ぼくは息を呑んだ。

玄関から半身を出しているのは、見慣れた——いつも遠くから見ている人だったからだ。

「ナンくん？ ……どうして？」

「片代さん……」

ぼくの勢いは萎えた。

しぼんでしまった。

下を向いた。灰色のコンクリが目に入った。

「あがる？」と杭が言った。

首だけで応えた。

表札を確認しなかった自分の愚鈍さを呪いながら、案内されたのはリビングではなく杭の部屋だった。

無味乾燥とした部屋だった。

およそオンナノコの部屋とは思えなかった。パイプベッドは病院にあるものようだったし、勉強机には参考書の一冊もなく、教科書しかなかった。マンガや小説などまったくなく。

もつとオンナノコらしい部屋に棲んでいるものなんだと勝手に思い込んでいたぼくの幻想は完膚なきまでに破壊された。目のものだけが、厳然たる事実だ。

ウィークリーマンションの一室みたいだと思った。

「くるかもしれない……。そう思ってた。エイダさんの言った通りになったね」部屋に入るなり、立ったまま杭が言う。

同じようにぼくも棒立ちだった。

急展開はぼくを氷結させていた。

「見て」彼女が指差す。そのさきにあっただのはラップトップコンピユータ。

目を凝らす。

信じられない光景がディスプレイのなかで繰り広げられていた。

ぼくと杭がいた。

違う——。ぼくとコウ。——これも違う。

ぼくを模したフェイクと、杭を模したフェイクがいるんだ。

「どついうこと？」

「最初は——興味本位だった」杭は言葉を選ぶようにたどたどしく言う。

「フェイクのこと？」

杭は首を左右に振る。「違うよ。ナンくんのこと」

「ぼく？」

「私ね——おじちゃんのいつけを守ってた。ううん、違うね——名前負けしないように頑張ってた。それにね、自分で言うのもおかしいけど、私はなんでもできた。外見だって悪くないんだから——だから、みんな私を崇めるべきだと思ってたんだ。だけど——それはほんとうの私じゃなかった。ほんとうの私はネクラなんだ」杭は一区切り置いた。「それでね、一人だけ私を崇めないオトコノコがいた。それが——あなた」

「え？」

「ナンくんはいつも素っ気なかった。鼻を伸ばしてる男子に、あは、この下半身思考のサルめえ、なんて思ってたんだよ。でもさ、一人だけ、ふうん？　って顔してるオトコノコがいたんだ。それが、ナンくん。あなただよ。だから、あなたの気を惹こうって思ったんだ。嫌いになった？　なったよね。そうだよね……。こんな思考回路の女はイヤだよね」

「そんなことは——」

「ぼくたちは似ていたのかもしれない。いや——かもしれないじゃない。似てると思った。」

「八方美人してた。たぶん、誰も気付いてなかったかも。違うかな——頼子——あのぴよこぴよこしてる子。彼女は気付いてたかもしれないね」

頼子の言動の意味がありありと解った。それはスパークするように一瞬にして理解された。

杭は物凄く饒舌だった。

溜まっていた膿を吐き出すかのごとく……。

「最初はそんな理由だったんだ。けど——そのうち、ナンくんが気になった。識ってる？　あなたって人気あるんだよ。一部の女子に。あの冷やかな目がたまらないとか、うざったい前髪の所為で解らないけど、実はイケメンだとか、文学少年っぽいのがいい、とか。」

頼子とかがそうなんだ。だから——その、誰かに取られやしないかって……。高校にあがってから、全然話できなくなって、その……。折角、一緒の高校受けたのに。もしかして、放送室のとき、録音した？」

「うん」

「お互い様だったんだね」始めて杭は笑った。「私ね——。怖かった。どんどんどん、ナンくんが冷たくなっていくから」

「不釣合いだと思ってた」

「そんなことないよ……。私はどうしようもない女なんだから……」
「それこそ、そんなことないよ」

「ありがとう……」杭はぼくの手を取った。初めてぼくらの距離は図書室の机のあいだよりも近くなった。「返事。してもいいかな」
ぼくは頷いた。

杭は言った。「私も好きでした」

でも、付き合ってくださいとは言わない。やっぱり、ぼくらは似たもの同士に違いなかった。

イエスもノーも要らなかった。

「熱いね。熱いね。ヘタをすると、あの部屋よりも熱いんじゃない？ バベツジ」

「オペラグラス、片側を貸せ」

「あいよ」

二人はひとつのオペラグラスを頬をつき合わせて覗き込む。

「熱いね。くそみたいに熱い。ほれ、ディープキスなんぞ——」覗き口からいつとき目を外したバベツジは首を捻った「なぜ、赤い？」

「あの……」

「なんだ、おまえ、もしかしてヴァ——」

「黙れ！」

「何なら俺が手ほどきを——」

「遠慮するに決まってるでしょうが。フレンチにでもやってもらおうよ」

「あいつらの口は臭いぞ。なんたってカタツムリを食うんだ」

「食い物のないイングランドよりはマシでしょうよ」

エイダは憤懣やるかたない様子で言った。

バベッジは顎を揺らした。「違うない」

「ところで——」満足したのかエイダはオペラグラスをケースにしまった。「フェイクは——本当に人工生命だと思う？　バベッジ」

「さあ、その答えは難しいね」

「どうして？」

「人工生命というのが、クリストファー・ラングストンの複雑系のようなものであるなら——それを生命的と判断するかどうかは、読み手も問題じゃないかな。弱い人工智能に倣い、弱い人工生命というんだよ」

「ふうん」

「それにだねえ。生命かどうか、つまり——化合物と生命の境目はどこか？　結局のところ、イヌやネコに心を見るように、見る側の問題だよ。それにさ、生物学的にアプローチするか、社会通念的に解釈するかも変わってくる。森岡浩之の『スパイス』っていう短編に、ゼロから人間をつくった話がある。それは人間と遜色ないが、国籍がない。だから、人間じゃない。人間はいつだって、人間を基準に考えるもんだ」

「つまるところ——、ピュグマリオンにとっては、アフローディーティアの魔法は要らなかつたってこと？」

「だねえ。それに厳密に人工智能と人工生命はイコールじゃないし、俺らがつくつたのは前者じゃないのかなあ。実際問題、彼らにアフローディーティアは要らなかつたんじゃないか。必要だったのはキューピッドさ」バベッジはほくそ笑んでから続けた。「キューピッドは——この場合、おまえか」

エイダは後半部をスルーした。

「でも、それって答えになってなくない？」

「だってそうじゃないか。俺が作ったのは、らしいものであって、そのものじゃない。C o g i t o e r g o s u m じゃなく、い
うなれば——C o g i t o e r g o e s t ってことさ。『私は
考える、ゆえにそれはある』ってね。結局、彼らはそうは考えな
かったってことかなあ」

「一つ訂正さえてもらうけど、フェイクを実際につくったのは私
ですからね。あんたは理論だけだったじゃない」

「聞こえないなあ」

とりあえず、エイダはバベツジの脇腹を蹴った。

ケーススタディ二 東雲春彦は二度死ぬ

ケーススタディ二 東雲春彦は二度死ぬ

三日目

ぼくは監禁されている。

同棲とか、そういう甘い香のするものじゃない。監禁と表現するしかない状況にぼくは置かれている。

ぼくを監禁している張本人は、高嶋^{ういか}初華という大学の同級生だ。ぼくと同じ——工学部情報システム学科に通っている二年生だ。

いま、彼女は家にいない。

ぼくの目の前にはほとんど家具のない六畳間が広がっている。いまだき珍しい畳敷きのアパルトマンだ。一応、オンナノコの部屋なので、バストイレは別になっているらしいけれど、ぼくは使ったことがないから、つまびらかに識らない。

「まだかなあ」

初華はまだ帰ってこない。

彼女が家に帰ってこない、ぼくは暇でしかたないのだ。するところがなにもなくて、暇で死ぬことはないといわれるけれど、それって嘘なんじゃないかと思えてくる。ほんと、暇で暇で死にそうだ。ぼくは箱の中に入れられていて、出ることができない。逃げることもできない。

箱はとても頑丈にできている。もっとも、逃げる気なんてハナからない。どうして逃げたくならないのかは解らない。このままじゃ、ぼくは大学の単位を落とし、留年してしまうかもしれないのに。そうなると、両親に大学から連絡が行き、あらいざらいが露見する。でも——危機感はどこからもやってこないのが不思議だ。

箱の一部にはガラス窓がある。そこから外を伺うことができる。

狭く小さい窓だけれど、ないよりはマシだ。

暗い部屋に長時間閉じ込められた人間は発狂してしまうんだそう
だ。解放されてからもナイトメアを見たり幻覚を見たりして、正
気ではいられなくなってしまう。だから、初華がこの箱に窓を用意
してくれたのはよいことだった。もしも——ぼくが閉所恐怖症持ち
なら、いまごろお陀仏なんだろうけど。

食事は彼女が与えてくれる。昼間は彼女は大学へ行ってしまうの
で、一日二食だけれど、動かないからそんなにカロリーは要らない。
二食で十分だ。むしろ、一食でもいいくらいで、いつも残してしま
う。

排泄は箱の中です。いつも、朝には綺麗になっているので、ぼ
くが寝ているあいだに彼女が処理してくれているのだと思う。

問題があるとすれば——三日間お風呂に入っていないことだろう
か。

「まだかなあ」

ぼくの声は虚しく響く。

TVでも見ようか？　と思うけれど、初華の部屋にはTVがない。
TVを見ない女子というのは結構珍しいと思うのだけど、彼女は
そういう人なのだ。

流行に疎い。

群れることが嫌い。

通俗的なものには興味が薄い。

ファッションというものにも関心がなく、大学に入ると女はケバ
ケバしくなるというがそんな素振りのない人だ。化粧だってそうだ、
いつもファンデーションくらいしかしない。

もっとも、ぼくは以前の彼女を識らない。知り合ってから二年し
か経っていないのだから、以前はもっと違った人物だったのかもしれないが知る由はないし、そんなことはどうでもいいのだ。人間は
成長するというより、革新されていくものだから、昔の彼女がどう
あれ、今の彼女こそが真実であり、すべてなのだ。

彼女はいつも一人で学校にいた。

トモダチはいないようだった。

化粧つけない顔につけたメガネの奥の双眸は、いつだって無表情に近かった。世の中にあまり関心がないのだと、ぼくは思っている。

そんな彼女がぼくを監禁しているという事実は、彼女の関心がぼくへ向いていたということを意味している。それは、どこか嬉しいことなのだった。

もしかすると、それが逃げる気の起きない理由なのかもしれない。誰かに必要とされることは、なんだか生きている心地よさを覚えるんだろう。

仕事人間が濡れ落ち葉になって急速にボケるのも——奥さんから「亭主元気で留守がいい」なんていわれ、だけど、仕事は定年しているから行かないし、だから、会社には最早必要じゃなくって、どこにも自分の居場所がないような気がする。そして、痴呆になってしまう。

黄色い線を越えて、ホームに滑り込んでくるオレンジ色の電車に向い、ダイブする人間も——おそらくは同じようなことなんだと思う。

だから、ぼくの居場所が初華の用意した箱の中でも、ぼくは幸せなのだった。

ガラス窓越しの壁掛け時計が見える。

——三時半。

そろそろ、午後の一限目が終わる頃合だ。

彼女がもうすぐ帰ってくる。

ぼくは浮き足だった。

早く、早く、と思っていると、鍵の外れる音がした。

すぐに、初華の声が続く。「ただいま」

彼女の声は——その雰囲気には則している。とても平坦で、機械音声みたいな感じなのだ。冷たい感じがするというタメもいるけれど、

ぼくはそうは思わない。

「おかえりなさい」とぼくは言った。

「うん。春彦くん。ただいま」

初華はキッチンを抜けて、リビングとを隔てる框のうえで微笑んだ。

たぶん、ぼくだけに向けてくれる笑顔だ。心臓がドクドクした。動悸がほんのちよっぴり高まった。

鞆を壁際に放って、乱雑に靴下を脱ぐ彼女に訊く。「大学どうだった？」

「どうってことないよ。いつも通り。なんにも変わらないよ」

「ふうん」

「そういうもののなの。世の中は」

初華はハアと嘆息した。

それから、肩をババ臭く揉んだ。そして、もういちど溜息をひとつした。

ぼくは訊ねる。「宿題とかある？」

「熱力学が、ね。来週、レポ提出」

「いまからやるの？」

「んーん。春彦くんとお話」

そう言つと、初華はガラス窓の前に座った。

キィと椅子が軋む音がした。箱の前には椅子があるのだろう。見えないけれど。

「あのさ」とぼくは言った。

「なに？」

「日中、暇なんだ」

暇がこんなに身にこたえるだなんて、識らなかった。

大学生になって以来、毎日勉強に勤しむこともなしに、日夜遊んでいた。飲み会はすすんで参加していたし、二次会三次会とハシゴを続けたあげくに、日が昇るまで馬鹿騒ぎに余念がなかった。

暇なんて言葉はすっかり、ぼくの辞書からその文字が薄くなつて

いて、消えかけていた。いまや、一番、大きなフォントで書かれているのだけれど。

「そっか。ごめんね。そのところまで気が回らなくて」

「いいよ。別に、気にしないから」

彼女がすまなさそうな顔をするから、ぼくが悪いことを言っちゃったみたいな気分になってしまう。

罪悪感が晒った。

「ゲームでもする？」

「TVないじゃない」

「もう。春彦くんも情報工学科の学生でしょう？」

初華のいうことがイマイチ飲み込めない。

彼女はわざとらしいヤレヤレの仕草をしてから言った。「パソコンのディスプレイでもできるんだよ。ゲーム」

「パソコンはあるの？」

部屋を見渡してみるが、それらしいものはない。

きっとノートパソコンなのだ。鞆の中に入っているのかもしれない。

最近はミニノートというものがはやっていて、ASUSの機種なんか一昔前のPDAみたいに小さいんだ。だけど、性能そのものはそんなに低くないし、ワードやエクセルを動かすだけなら問題はない。

「あるよ。当たり前じゃないの。大学生の三種の神器のひとつ」

「あと二つは何？」

「ケータイ？」

「もう一つは？」

「先輩の過去レポ？」

「持ってるの？」

「んーん。私、サークルにも入ってないし、トモダチ、いないし」
クラスメートたちと少しも仲良くなっていない事実を少しも億劫に思っていない様子だった。毅然としていた。諦念とは、違った。

「だったら、ぼくの家にあると思うよ。このまえ、部室のロッカーの中のやつ、全部コピーしちゃったから」

「そうなんだ」

「取りに行こうか？」

「ダメ。逃げられる」

「逃げないよ」

「そんなのわかんないじゃん。秋町さんのところへ行ったりしたら困る」

「秋町さん？」

「こつちの話」

初華は黙った。

彼女の顔は、少しもぼくが逃げるなんて思っではないようだったが、秋町さんというのが誰なのか凄く気になった。聞き覚えがあるような、ないような、不可思議な思いがした。秋町さんって誰？それに、ふつつ、逃げるなら警察に駆け込むものだとも思った。彼女には確信があるのかもしれない。ぼくが憲兵を頼ったりしないんだということを、理解しているのだ。

「ねえ」

「ん？」

「暇潰しの道具が欲しいな」

ぼくは話を戻した。

「ううん。そうだ——」初華はいったん、椅子をたつて、しばらくしてから戻って来た。その手にはA4判の大学ノートが握られていた。無味乾燥で、ダイソーで手軽に手に入るたぐいのものだった。

「日記とかつける？」

「肉筆はイヤだなあ」

ぼくはワガママを言った。

初華は困った顔をした。

「じゃあ——」

カタカタという音がして、気がつくともぼくの前にパソコンがあっ

た。

いつのまに？　すごい早業だ。箱が開く気配もなかったのに。

「ありがとう」

「どういたしまして。でもネットには繋がってないからね」

「別にいいよ」

ぼくはネット中毒じゃないし、巡回しているサイトがあるわけじゃない。

TVもネットもなく——外出もできない身の上じゃ、世間との隔世が広がっていくばかりだけれど、ぼくは決して世界から寸断されてはいない。初華とぼくのあいだにはリンクがある。ぼくらは繋がっている。

「それじゃ、夕飯つくるから」

そう言って、初華はキッチンに消えた。

ジュウジュウという音がしてくる。

臭いはしない。音だけがする。油の飛ぶ音がする。

今晚のオカズは何だろう——？

四日目

小さい頃——漫画家になりたいって思っていた人はけっこう、多いんじゃないだろうか？　オンナノコはケーキ屋さんとかナースさんとかが多勢を占めていて、オトコノコの場合、インドアーなら漫画家とかゲーム屋で、アウトドアだとサッカー選手とか大工さんと相場が決まっている。

だれしも、子供のころは絵を描くのが好きだ。

子供は自分の絵がヘタクソか上手いか、を気にしない。

一説には、子供のころはまだ視神経からの情報を脳が処理できていなくて、実際、子供たちが描くように見えているんだ。という話がある。だから、大人が「その絵はおかしい」っていつてもダメだ

し、だからこそ——子供の描く絵はノビノビしている。

父が画家だったばかりに、ノビノビとした絵を描けなかったとピカソが悔やんだように、ときとして、それはとても魅力的なんだ。初華に大学ノートを見せられたときに思い出したのはそれだった。ぼくも無邪気に絵を描いていた。

大学ノートのページを升目に区切って、そこにエンピツでお気に入りのマンガのキャラクターを描き込んでいく。

本来ありえないキャラクター同士が、作品間の垣根を越えて邂逅し、戦う。それは子供心に、ユーフォリックなものだった。

いつからだろう？

描かなくなってしまったんだろう？

自分の絵が取るに足らない愚物だと気付いてしまったからだろうか？ それとも、試験受験勉強、そういったものにかまけてしまっていたからだろうか？

そういえば——どこそのアニメーターが言っていたのを思い出す。

「できる人間は十台のときに完成している」

すごく、傲慢な言葉だと思った。二十歳になったぼくには、無理だといわれているのだから、頭にもくる。

しかし、そんなことはいい。いま——ぼくは絵を描きたいんだ。

ぼくはパソコンを起動して、MSペイントを立ち上げた。

初華には絵を描く趣味はないようで、SAIもフォトショップも入ってはいなかったし、フリーウェアも何一つ入ってはいなかった。だから、MSペイント以外に選択肢が用意されていなかったのだ。

きょうは土曜日で大学は休みだった。だけれど、初華は家にいない。

会わなくちゃいけない人がいる。と彼女は言っていた。

それがだれなのか、ぼくは詮索しなかったが、彼女は教授だと言った。名前は——告げなかった。聞いたところで、二年生じゃゼミもないし、授業で会うくらいだ。どうでもいい。しかれども、初華は何の用事があったのか？ そこだけは気がかりだった。

エンピツツールを選んだ。

何年ぶりだろう。こうして、絵を描くのは。

ぼくはがむしゃらになった。筆をひとたび取れば、エンジンがかかった。長らく調整してなかったエンジンはなかなか調子を取り戻さなかったが、排気量だけは人一倍だった。もくもくと吐き出されるCOはぼくの頭をクラクラにさせた。ランナーズハイならぬ、ペインターズハイが現れた。

ぐりぐり動くマウスカーソル。生まれる線。

間違った線を消しゴムツールで消す。

何度でも納得がいくまで訂正を繰り返す。線たちは生まれては消え、そして生まれた。輪廻転生の世界があった。

頭の中のイメージは見知らぬオンナノコだった。初華ではなかった。

オンナノコは線の生死の中で形が整えられていく。

彼女が降誕するのは――弥勒の現れるとき、とでもいうように。

「できた」

久方振りにしてはけっこう、よくできたように思う。悪くない――もちろん、自惚れや自分贔屓も多分に含まれていることは否めないのさけれども。

時計を見たら、描き始めから二時間も経っていた。凄い集中力だと、自画自賛してもいいんじゃないかな。

勉強に転用できたなら、もつとうえの大学へ行けたかもしれないけど、そうじゃなくてよかった。だってそうだろう？ ぼくが他の大学へ入学してしまっていたとすれば、初華とぼくは出会わなかったんだから。

「ただいま」

くだんの初華が帰宅した。

靴を脱ぎ捨てる音が続いた。

「おかえり」

このやりとりもきょうで三回目。なんだか、新婚夫婦みたい。

ぼくはほくそ笑んだ。

いつものように、初華は鞆を壁に投げた。それから、ぼくのもとにやってくる。これも常のパターンだった。

「日記書いたの？」

窓から初華が覗き込む。

半日家を空けていた彼女には、疲労感があった。五歳くらい一時的に老け込んでしまったような、そんな感じ。

ぼくは「違う」と正直に答えた。

彼女はあまり興味がなさそうだった。

だけど、折角熱中して描き上げた渾身の力作を無碍にするのも気が引けた。「見せて」といわれることを暗に期待していた。「絵を描いたんだ」

「絵、描けるの？」

彼女の吸い込まれるような漆黒色の瞳に、わずかな尊敬の色が生まれたことをぼくは見逃さなかった。頬が上気した。

絵が上手いと褒められたことはない。だから、余計に嬉しく、ぼくは踊り出しそうだった。

だけど、謙遜を忘れない。

「大して上手くないけど」

「見せてよ」

「いいよ」

ぼくは箱の窓にパソコンのディスプレイを翳した。窓から彼女に多くの力作を見せるためだった。

十秒ぐらいそうしてからパソコンを床に置いた。

初華がぼくを睨んでいた。

どうして、睨みつけられるのだろう？

「なんで——秋町さんを描くの？」

剣呑な音に乗せられた言葉がやってくる。

「秋町さん？」

ぼくは頭に浮かんだオンナノコをそのまま描いただけだった。

それが秋町さん、その人だなんて識らなかつた。

「識らなかつたんだ」

「そつだよね……」

今度はうつてかわつて、消沈した声だつた。

癖つ毛の髪を指先で手遊びする。

「そつだよ。ぼくは秋町さんなんて識らないんだ」

「うん」

彼女は得心したようだつた。それを証明するかのように、何度も何度も首を縦に振つた。あたかも、自分自身に言い聞かせているかのようにだつた。

「それ——消してよ」

「なんで？」

「私が気にいらない」

「ごめんなさい。でも——」

「でも？」

「一生懸命描いたんだ」

窓枠の中から、初華の姿が消えた。不安になつた。

ぼくは捨てられてしまつたんじゃないか、そんな疑念がやってきた。額から塩つ気の多い汗が出た。

でも、それは取り越し苦労だつた。

彼女はすぐに戻つてきて、再びぼくにその姿を見せてくれた。

「だつたらさ、私を描いてよ」

「初華を？」

「うん。そしたら——赦してあげるよ」

「解つた。そうする」

初華を描くのはイヤじゃない。全然OKだ。

目を閉じて、頭の中に彼女の顔を思い浮かべようとした。浮かばなかつた。瞑目して真つ暗になつた景色にはなにもなかつた。秋町さんとやらは簡単に思い描けたのに……。

毎日、見ているはずなのに妙だつた。

頭をよじれそうなほどに捻った。

無駄だった。

最終手段にぼくは打って出ることにした。

「写真とかない？」

「待ってて」

ぼくは何時間もかけて彼女を描いた。

初華を描くのだからと意気込み過ぎていたキライもあるが、それだけじゃない。

写真という資料があると、似せなくちゃいけないという脅迫概念があった。その所為で、なかなか最後の一筆にたどり着けなかった線のひとつひとつのズレが無性に神経を逆撫でしてくるのだ。

ぼくがMSペイントと写真のあいだを右往左往しながら、悶々と筆を振るっているとき、初華はレポートを書いていた。

大学生協で販売されているレポート用紙と彼女は首っ引きしていた。

エンピツをくるくる回したり、鼻の上に乗っけたりしていた。たまに熱力学の教科書に目を落とした。

六時間くらいを費やしてようやく完成した似顔絵に彼女は満足した様子だった。

さっそくプリントアウトして、自分の机の上に飾るんだといったそれは恥ずかしいと、だから、やめて欲しいと懇願した。ぼくの請願はリヒューズされた。

彼女はほんとうにぼくの拙い似顔絵を机の上に飾ったらしかったらしいというのは、箱のなかからじゃ、それを拝むことが適わないからだ。

見えないということは、気恥ずかしさを漸減させるのに一役買った。

がさごそという音と共に目が醒めた。

初華が前かがみになっていた。

「なにをしてるの？」とぼくは訊ねた。

彼女は振り返ることなしに短く応える。「アルバム」

「アルバム？」

「そう。アルバムを——探してるんだよ」

「なんで？」

「なんでもいいでしょう？」

ツンケンな様子だった。

今日の彼女はご機嫌が麗しくないらしい。生理だろうか？ おおにありうる可能性だった。

カノジヨは生理痛そのものは大したことではないんだ、としきりにぼくに言うクセに、態度がふだんとがらりと違ってしまうので、ぼくのカノジヨが月の日にあることを容易に識り得た。初華も同じなんじゃないかと思った。ぼくのなかでオンナノコの規矩となっているのは彼女ただひとりだからほかの可能性を慮ることをしなかった。

しかも間の悪いことに、このとき、ぼくは自制心を忘れていた。それは遠い忘却の地平にあって、だから、自然に口が動いてしまっていた。

「生理？」

訊ねたぼくが愚かだった。オンナノコにこんなことを訊くべきものじゃなかった。口は災禍のもとだ。

ゆっくりと、緩慢に初華の首が上下した。彼女は厳しい眼差しをぼくに送りつけ、それから低い声で、

「馬鹿なこと言わないでよ」

反射的にぼくは謝った。「ごめん」

「ま、いいよ。事実だからね——まったく、困りものだね。人間、生きてるとき、そういうシガラミがあるから。社会的なものっての

は挿げ替えられるし、いざとなったら無視してもいいけど、身体は一つだからね」

愚痴つたらしいものを述べたててから、初華は嘆かわしいといわんばかりの身振り手振りをしてみせた。

生理であるのは本当だったようだ。

初華の目が線のように細まった。

「いいよね。オトコノコは生理なくって」

間髪与えず、応えるべく。

「そんなことはないよ。男だって数日、やらないとダメなんだ」

「オナニー？」

臆面もなく彼女は言った。

あまりにも堂々としていたので、羞恥心を感じるのはぼくの側だった。

「……そう」

「なんで、春彦くんが照れるの？」

きつとぼくの頬は紅潮していたに違いない。鏡があつたならばぼくはそれを識ることができただろう。されど、箱のなかと外を連絡するガラス窓の反射率は悪く、そこにぼくの顔は映りこみはしない。僥倖だった。

「だって——」なにか言い訳を搾り出そうとした。だが、なにも浮かばず、ぼくは話題を切り替えることでお茶を濁すことにした。このままじゃ、男の生理について語らざるおえないような気がしていたのだ。「アルバム、見せてよ」

三秒ほどの短いデイレイがあつた。

初華は首を少しだけ動かし、箱の窓の上部へ向けた。彼女の丸っこい顎から首へのラインがそそりたつようになる。彼女は言った。

「まだ——探してる最中なの」

アルバムはそれからしばしして見付かった。

もともとそんなものの多くない部屋なのだから、探すまでもない

んじゃないかと内心思っではいたけれど、口禍に見舞われるのは二度と勘弁だった。

写真屋でもらえるような取り立てて特別さのないアルバムには『大学入学』とタイトルが油性マーカーで書かれており、世俗に關心のない彼女には意外な気がした。いや——初華は自分自身のことには関心があるのかもしれない、だとすれば、自分の思い出を外部保存して置こうと考えるのは至極当然の帰結ではあった。

「ほら——」と初華は一枚の写真のうえに指先を置いた。「これを憶えてる？」

写っているのはどこかの山の頂上だった。

彼女は登山服を着ていた。ぼくも着ていた。地味目の色合いの登山着はあつぶろしく、空気は濁っていて、撮影日は冬の時期であると思われた。

ぼくらは肩を組んでいた。

仲よさそうに笑っていた。

初華だけがカメラ目線で、ぼくの視線はよこっちょへ流れている。カメラのレンズを見てはいなかったみたいだ。

ふたりの背中を越えて、けぶるような雲があった。かかる山頂よりも低い山の緑が雲のしたにタケノコのように突き出ている。

「うん。憶えてるよ」

「よかった」と初華は手を叩きながら言った。とても嬉しそうな顔をする彼女は、口をすぼめると、「憶えてなかったらどうしようかと思った」

きちんと記憶はある。

ぼくらは二人で山へ登った。

「えっと——なんていう山だったけ？」

「——山だよ」初華は山の名前を言った。それは忘れているだけはある、実に憶えにくいものだった。

何度もこれから山の名を訊ねることになるんだろう。ぼくは十回くらい耳にしないと記憶に残せる自信がなかった。

「そうだったね。そういう名前だったね」

「そうだったんだよ。そういう名前だったんだよ」

アルバムにはぼくらの二年間が刻印されている。

時間はその歩みを決してとめたりはしないが、古い時間ふるを拘束させることはできるのだった。なによりそれを証明するのは写真という文明の利器であった。

その日の朝食を忘れてしまつのはさすがに健忘症のケがあるのではないか、と疑ってかかるべきだけれど、一週間前の朝飯ならどうだろう。たいていの人は、「一週間前の朝食はなんでしたか？」と脈絡なく質問された場合、戸惑い、首をかしげ、十数秒頭を擦ったあかつきに得られる答えはおそらく——「憶えていない」じゃないかな。

人は簡単に記憶を忘れるし、なにも人間に限った話じゃない——それなりに高等な哺乳動物であつても簡単に過去を忘却の彼方へ投げ捨てる。それが、ハードの問題か、ソフトの問題かは識らないし、ぼくの知識で明かすことはできない。そして、コンピュータといえども情報を完璧な状態で保存することはできない。

CDROMに刻まれているデータの大半はゴミなのだというのも——衆知のことであるし、デジタルなものは情報欠損しにくいように、情報の乱れを検閲できるようにタグがついている。

けれども——人間に近いマシンはどうなるのだろうか？

脳味噌は記憶と演算を司る場所が明確に分化されていない。コンピュータは違う——プロセッサとメモリーは別のものに違いない。

ぼくたちは記憶を辿った。

過去が収められた小冊子をめぐる旅路は面白いものだった。失われていた記憶が甦ってくるのだった。

もしも——ロボット——人工知能ができたなら、彼らには《忘却できる構造》を与えたほうがきつといいし、素晴らしい結果をもたらすだろうとぼくは思った。

すべてを憶えていたら、過去へ思いを馳せることができず、それ

は懐古趣味と紙一重だけれどもロマンティズムがそこにはないとは、また、言い切れないから。

ぼくたちはこの日、アルバムを観賞することに一日を費やした。それはとても充実した時間だったが、惜しむらくは——人物がフレームに切り取られたものが少なかつたことだ。

ニジマス釣りにいったという写真には、ニジマスのてかる緑と黄色の筋が踊っていたが、魚を握る白い手がぼくのものか、彼女のものか、判断がつかなかった。実際に釣りをしている風景は一枚とてなかったのだ。しかれども、ぼくは識っていた。記憶は嘘をつくかもしれないけれど、ぼくは彼女といったはずだった。

釣果はあまりはかばかしくはなかつたけれど、焼き魚にして、塩焼きにして——腹のなかにニジマスは収まつたはずだ。

けれど——と脳裏に不思議な色が現れて消えた。

それは黒でもあり、白でもあつた。しかし、灰色ではなかつた。

それは素朴な疑問の色だった。

アルバムに刻まれた過去はどれもこれも、アウトドアなものだった。ぼくはたしかに、高校生のころは日曜とあらば釣りに出かけているくらいにツリキチであつたのは事実だし、サークルのメンバー総出で山登りをしたこともある。

だけど、初華には似合わない。

どうしてか。

似合わないとしかしいようがない……。

六日目

ぼくがそのことに気付いたのは単なる偶然だった。ぼくが目敏いわけじゃない。たまたま、のことだ。

ウインドウズアップデートが「再起動しますか？」とぼくに語りかけた。

初華は「ネットには繋がっていない」と言っていた。

だから、常識的に考えればウィンドウズアップデートがされるはずはない。インターネット経由でアップデート情報は配信される。アップデートされたのだから、回線がインターネットに通じているのだ。

とするれば、彼女が嘘を言っていたことになる。ネット環境がないというのは事実無根だったわけだ。

だけど、ぼくは彼女を信じていたし、昨晚彼女はパソコンをいじっていた。なにをしていたのかは識らないが、レポートでもあったんだと思う。

つまり――。

彼女はぼくに外界と接触させたくないから、いつもネット回線を切っていたのだと考えられる。それはそうだろう。ぼくがメールでもスカイプでもなんでもいいけれど、友人たちに連絡を取ってしまった場合、このイビツな関係性が露見してしまうのだ。しかし、きようはそれを忘れてしまった。単純な不手際と考えるべきだろう。

これがもつとも良心的で、彼女を信頼しているものが導き出すべき答えだ。

約一週間囚われの身だったぼくは外の世界がいま、どうなっているのか、興味が無いわけじゃなかった。しかし、他方、調べるべきことも頭のなかに思い浮かべられるわけでもなく、なんとなくのネットサーフィンをした。

一週間行方不明なのだから、ぼくのことをニュースになつてやしないか、仄かな期待感がマウスをクリックさせたが、ぼくに関するニュースはここ一週間のものなかでは皆無だった。

当然だと思った。

日本の大学生は最後のモラトリウムを満喫せんと躍起だから、一週間くらいがなんだっていうのさ？

初華はぼくがネットの海に漕ぎ出していたことに気付かなかった。

七日目

初華はきょうも大学だ。

また独り、ぼくは家に、箱の中に残されている。それでも、きょうは朝しか講義がないそうなので、彼女の帰りは早い。

さて、本日も絵を描こうと意気込んでMSペイントを起動させようとしたときだった。

ぼくは誰かの気配に気付いた。

シックスセンスに誘われて瞳を向けた。その先に映ったのは二人組みだった。いつの間にか、ガラスの向こうに二人の男女が立っていた。

ぼくは心底驚いて、言葉を忘れた。

初華はきちんと部屋に鍵をして学校に行くはずだし、だとすれば、この二人は不法侵入者——窃盗犯。けれど、そうとも思えない。

女のほうは小柄なアッシュブロンドで、品はよさそうだったし、

男のほうはだらしない感じがしたが犯罪者には見えなかった。

いったい、何者でなにをしにきたんだ？

アッシュブロンドの女が言った。なんでもない風だった。はいこれから世間話の開幕です。そんな調子。

「あなたは、アイザック・アシモフをご存知ですか？」

「名前くらいは——」聞いたことがある。有名なSF作家だったはずだ。

彼女はぼくの答えなど最初から気にしていない様子で、ぼくの言葉に自分の言葉を被せるように続ける。

「彼は——正確には編集者キャンベルとの共同で、ですが、ロボテイクス三原則、というのを考え付きました」

「はあ……」

「これくらいは——識っていますよね？」

女は小首をかしげた。

言葉らしい言葉は多くの口からは出ない。

出るのは漏れる呼気ばかりだ。

「はぁ……」

「もつとも、言語というのは恣意的ですからね、ロボティクス三原則には——いわゆる定義の範囲についての問題、フレーム問題といわれるものですね、これがついてまわります——」この女は何を言っている？　ぼくは訝しむ眼光を送ったが、全く彼女は意に介さなかった。漫然と講釈を垂れ続けるのをやめたりはしない。「アシモフ博士は、『心にかけられたる者』にて、面白い解釈をしていますよ。——と、その前にあなたはどうか、SFに疎いようですね」女は一旦黙ると、傍らの男に目配せをした。彼は何時の間にか、ホワイトボードを持っていた。瞬時に文字が現れる。

ロボティクス三原則

第一条　ロボットは、人間に危害を加えてはならぬ。また、その危険を看過することによって、人間に危害を及ぼしてはならぬ。

第二条　ロボットは、人間によって与えられた命令に服従せねばならぬ。ただし、与えられた命令が第一条に反しない限りに於いて

第三条　ロボットは、第一条及び第二条に反する疑いのない限り、自己を守るべし。

「と、いうことです。ところで——人間って何でしょうね？　まあ、アシモフ博士自身にとっても、後年ロボティクス三原則は言葉遊びのようになっていきますが、短編作品『心にかけられたる者』にて、ロボットが言葉遊びをするんですよ。人間ってのは、彼ら自身、つまりロボットたちのことだ、とね。のちに、『ロボットと帝国』で

第ゼロ条が生まれた経緯もさもありなんと言いましょうか」

「何が言いたいんですか？」

ぼくは焦れていた。

なんなんだ？ こいつら。

こつちが箱の中から出れないと思って遊んでいるんじゃないか？

「んー。困ったね。バベッジ？」

女が背後を振り返る。

男はやる気のなさそうな声で言った。「ああ。そうだなあ」

アッシュブロンドが再びぼくに向き直った。

「もつともですね、あなたには関係ないことなんですけどね。東雲さん。あなたには三原則の枷はないですから」

だったら、なんのために説明したんだろうか。

解せないことばかりだ。

そもそも、人間であるぼくにロボティクス三原則とやらを講釈する理由はいったいどこにあるっていうんだ？

初華のためにずっと箱のなかに留まり続けるぼくは、あたかも人形のようなとそっくりいいたいのだろうか？ これは婉曲表現なのだろうか。なんていうイヤガラセ。一体全体、どこのどいつの差し金なんだ？

ぼくはいろいろ考えながらも、二人組みを睨むのをやめなかった。こつちの思案など素知らぬ顔。銀髪女は言う。「人は嘘をつきます。なんのために嘘をつくのでしょうか？ 人は人が嘘をつく前提で生きています。優しい嘘というのものがありません。これは——許される嘘と一般的には解釈されています」彼女はいったん言葉を切った。ホワイトボードを指差すと続けた。「ロボティクス三原則第一条の——人危害を加えてはならない。人間三原則というものがあるんですが——」

彼女はホワイトボードを叩く。

しょうがないといった顔付でバベッジなる男が頷くと、ボードの内容が書き換わった。

人間三原則

第一条 人間は、人間に危害を加えてはならぬ。ただし、その危険を看過することによって、人間に危害を及ぼすことがある。

第二条 人間は、人間に真摯であれねばならぬ。ただし、嘘をつくことはままたある。

第三条 人間は自分のことを自分ですべきである。ただし、やる気がある場合に限る。

ぼくの厳しい視線そのものはなんの効果もなかったが、女は長話をする気もなかったようだ。軽く肩を震わせてから、言った。

「では、こうしましょう。ここに短編連作『アイ、ロボット』収蔵の『うそつき!』のファイルを置いていきます。ついでに、『心にかけれたる者』も置いておきましょう。——あとで、読むといいですよ。——嘘のフレームはいつたいどこにあるんでしょうね？

それは写真のように区切り撮ることができるでしょうか？」女は意味深に笑った。「では、さようなら」

二人組みはいなくなつた。

不思議なことに彼らは物音ひとつ立てなかった。もしかすると、やり手の泥棒なんじゃないかと思つた。

ほんものの詐欺師ほど身なりがよく、ヤクザの幹部ほど礼儀正しいというのと一緒に高等な泥棒ほど泥棒らしからぬものなんじゃないだろうか。

だとしたら——なにを彼らは盗りにきた？

——解らなかつた。

玄関の開く音がして初華が帰宅したので、ぼくは考えることをやめた。

ただ——「嘘のフレーム」というのが気がかりでしょうがなかった。

八日目

渡された小説を読んだ。

ぼくは日頃読書なんかしないし、活字を見るのは好きじゃない。目が疲れるというのが正直なところだ。

途中で投げ出しそうになること幾たび。

読破できたのは、短編だったからだろう。長編小説であつたならば、ぼくは読了することなど決してできなかった。

まず、人の心を読めるようになってしまったロボットが人間に危害を加えないように嘘をつき、さらに嘘をつき、嘘を嘘で上塗りしていく滑稽な話の一つ目。

二体のロボットがロボットにしか解決できない問題に取り組み、その結果、自分たちこそ人間であると確認してしまう話が二つ目。

どちらもなにをいいたいのか。さっぱりだった。

いや——ひとつ確かなのは人間の定義をめぐる問題だろうか。そう考えれば、わかりかしテーマは判然としている。

定義の問題というのは、難しい。おそらく正しい答えはないし、答えがないことこそが、あの女がいつていたようにフレーム問題を引き起こすのだろう。どこに線を引いて区切れればいいのが、マシンには解らない。

「また、似顔絵描いてよ」と初華が科をつくりながら、ぼくに言うてきた。

ぼくは一も二もなく頷いた。

なんだか『ミザリー』みたいだった。

写真なしに描いた。

ペインターズハイはやっぱりやってきて、無我夢中。熱病に冒された人のようにペンを走らせる。

そしたら、どうだ！ 描きあがったのは秋町さんという女性だった。

ぼくは慌てて消そうとした。しかし、初華は目敏かった。

彼女は癩癧を起こした。またたくまにやってきた地震だった。

わけの解らない言葉を――罵詈雑言だったのかすら怪しい――ぼくに投げる。一方的に投擲の嵐に晒された。ぼくは耐えた。彼女の怒りが静まるまで、忍耐強く待った。待つことが唯一の講じられる手だった。

箱の中にいるぼくには手を出せなかったし、こちらも手を出せない。あるのは口撃のみ。駁してもいいのだろうけれど、ぼくはそうしなくなかった。だって、彼女を憤らせたのはぼくの責^{せめ}なんだもの。オニババアやヤマンバのように髪を振り乱した彼女は言った。肩と胸が激しく上下していて、息が荒い。ハアハアという音が聞こえてくる。「どうして、秋町さんを憶えているの？ 私は……そんなこと教えてないのに」

初華の頬の筋肉がわずかに盛り上がった。奥歯を噛んでいる。噛み締めている。

ギリギリという音がしそうだったが、幸いにもそのあまり心地よくない響きにぼくが晒されることはなかった。

「そっか――」彼女は両手を打ち合わせた。右手が拳で、左手の掌に打ち下ろされる。ポンという間の抜けた音がして、「彼女が生きているからだね」

「へ？」

「殺せばいいんだよね」

「なにを言ってるの？ 初華」

殺すだなんて物騒だ。

そこまで怒らなくなっただけなのに。

ぼくは彼女を宥めずかそうとして――彼女が本気であることを識

った。

彼女の目は少しも笑っていなかったし、また逆に怒ってもいなかった。冷徹さだけがそこにあり、眼球は炯々と輝くように不気味で、つりあがった口の端っから除く犬歯はいまにも得物に突き立てんばかりに小刻みに震えている。

「春彦くんは——私だけのものなんだから……」

九日目

玄関の扉があく音。

続く足音はふたつ。

いつもなら——ひとつ。

だけど、きょうはふたつ。

ひとつは初華で、もうひとつは——。

「どうぞ、秋町さん」

「ねえ、なんの用なの？」

「ここに春彦くんがいるんだけど」

「ほんとうに！」

驚きのこえを秋町さんがあげた。彼女はどたどたとした物音をたててキッチンを抜けてリビングへやってきた。

彼女はぼくのあたまのなかに思い描かれたとおりの人だった。

さして美人というわけじゃないけれど、やっぱり特別な人だった。

「いないんだけど？」

しげしげと六畳間を見渡してから彼女がぼやくと、すぐさま初華が応じた。「お風呂場いつてみなよ」

ニタアと初華が笑った。その笑いはニタアとしか形容できない。

悪魔のほくそ笑みだった。

「臭いんだけど……」

秋町さんが鼻を摘むのが見える。

見るからに眉根を歪ませていた。

「そりゃ、そうよ。ホルマリンがお風呂いっぱいぶんも見付かるわけないじゃないの」

耳をつんざく音。まさにそれ。

金切り声。

秋町さんのものだった。

彼女は洗い場から飛び出すように出てきた。

彼女の顔は泪で濡れ、驚愕と恐怖と怯懦に顔がイビツに歪んでしまっていた。彼女は気が動転していて、立っているのもままならなくなり、床にへたり込んだ。

震える声で彼女が言った。「なにを……なにをしたの？ あの――

――あの黒ずんだ……」

言葉は途切れ途切れだ。

手で口元を押さえ、彼女はえずいた。

「殺しちゃったの。だってね、春彦くんいうこと聞いてくれないんだもんね」初華はキツチンへ向かった。なにかが輝き、翻った。光が白刃を呼び起こす。――再び戻ってきた彼女の手には包丁が握られていた。「でね――私、つくったの。私のためだけの春彦くん。なのに、なのに、あんたの絵を描くんだ。ねえ？ どうして？ ねえ、教えるよ！」

初華が包丁を振りかぶった。

彼女の狙いは明白だった。

ぼくは叫んだ。

「逃げて！」

初華の動きが一瞬とまった。

雷に打たれたかのごとく、秋町さんが起き上がった。彼女は思いっきり初華の手首をはたいた。

「いま――ハルくんの声がした」

さっきまでの怯えが嘘のよう、彼女は凜呼としていた。彼女は初華を睨めつけた。

「春彦くんは死んだの！」

包丁を失っても初華はめげない。やおら、秋町さんに飛びかかったが、彼女の身体は空を切った。

すでに秋町さんはそこにはいなかったのだ。

彼女は軽やかに身を躲してキッチンをあつというまに駆け抜けた。ブーツカットジーンズのポケットからケータイ電話を彼女が取り出すのが見え、それを最後に彼女の姿はぼくの視界から消えうせた。

玄関の扉が乱暴に開閉される音色が六畳間に充ちていた。

「あはは」

初華が晒う。

初華が晒う。

畳のうえに投げ出された包丁を握ると、ぼくのほうへとにじりよってくる。

アイスホッケーマスクを欠いた女ジェイソンみたいだった。

「ねえ、ねえ。春彦くん。どうして、秋町さんばかり見るの？ あのビッチのどこがいいの？ ねえ、ねえ、ねえ、ねえ」

ねえがリフレインする。

多重奏されるねえが迫ってくる。

ぼくは背中を逸らそうとして――。

「初華」

「あなたをつくったのは――私！ 私なの！」

「なにを言っているの？」

「まだ――解ってないの？」

初華は晒う。

晒うのをやめない。

「あなたはフェイクなの。私の人形なの！ 私のためだけに、私がつくったの。ほんとうの東雲春彦はもう息をしていないんだッ！」

「ぼくはここにいます」

意外と冷静な自分にびっくりした。

ぼくは彼女の言葉を鵜呑みにする。

「箱の中？ そうだね——そう認識するように仕向けたんだもの……。そんなの、あたりまえじゃない！」大袈裟な動作で彼女は諸手を振りかぶった。包丁の腹が室内灯を反射する。「あなたはいつ、寝る？ いつ、トイレに行く？ いつ、ごはんを食べる？ 髭だって伸びない！ お風呂にだって入ろうとしない！」

言葉を失うとはこのことだった。

反論することがなにひとつできない。

ぼくはきょうの朝食のメニューを憶えているが、その味を記憶していない。

寂寥感が訪れたが、怒りや哀しみは微塵も訪問せず、ぼくは彼女を見守った。

初華は晒いながら続ける。

「あなたと私のあいだには——二年間の思い出なんかない！ 全部まやかし。私たちの道程はまだ始まってから一週間しか経ってないのッ！」

登山の思い出は嘘だったのか。

不自然なアルバム。そう——あれはきつと合成写真だったのだ。

「もう駄目だね。私も同じにならなきゃいけないんだ」

血飛沫が飛んできた。

箱の窓が赤黒く染まった。

初華が頹れた。彼女の首元から噴水のように血潮が噴き出していた。

そして——画面が真っ暗になった。ぼくは死んだような気がした。

ポリゴンとテクスチャの園。

ぼくたちは河のほとりに身を寄せていた。

フォトンのようなものが河面のうえに踊っている。現実ではありえない演出だった。

「ねえ、ニジマスつりを憶えている？」とかたわらの初華が言った。「憶えていない」とぼくは言った。

初華の首がしなった。

手が伸びてきた。

「あなたは——あなたはッ！」

彼女の指がぼくの首を捉える。

ぎりぎりとした膂力。

締め付ける握力。

こんなことじゃぼくは死なない。

ぼくは死なない。

ぼくは——人形。

なのに——頭の中がぼんやりしてきた。

死ぬとき人間は走馬灯を見る。

ぼくは人間じゃないのに、それを見た。

ぼくのカノジョ——ガールフレンドの秋町彼方が微笑んだ。天真

爛漫な笑顔がぼくを高天原に見送った。

TVの画面でニュースキャスターが喚いている。

緊急特番だ。

番組の日程を変更して放送しておりますの注意書きがテロップとして画面下部を河のように流れている。

『凄惨な事件です』

LIVE映像として映し出されたのはとあるアパルトマン。

三階建てのボロっちいものだった。

『二人の死体が発見されました。一人は。○大学の二年生東雲春彦さん、もう一人は同級生の高嶋初華さん。東雲さんの死体は浴槽で発見され、その腐敗状況からすでに死後数ヶ月が経過していると思われる。いっぽう、高嶋さんの死体は数日内に——』

報道員は興奮しているようだった。

ニュース映像を見ながらバベッジが口を開いた。

「そういえば、彼らの通っていた大学には脳科学の権威がいるんだってね」

「僻み？」にんまりとした面持ち、そして弾んだ調子だった。

「いやいや。だって、おかしいだろう？ フェイクが過去の記憶を持っているってのは」

「初華は——そそのかされたってこと？」

「さあ、どうなんだろう。本人が死んでしまっただけは真相は闇のなかだ。ただ——一番卑近な可能性は初華が一から記憶を打ち込んだってことかな。彼女、大学へ行くといって春彦の過去を洗っていたようだしね」

「そうね。春彦の死体が死後数ヶ月ってのがなよりの証拠でしょうね——」エイダは溜息混じりに言った。「一から入力しても、過去が過去に共にいた女を想起させてしまうのは——皮肉なことね」
バベッジは感傷的な雰囲気^{ミセルコルディアータ}に与する気はないようだ。

話題を彼は切り替えた。

「スケプティシストであるヒラリー」パトナムの思考実験に、『水槽の中の脳』というのがあるんだが——」

「——脳だけを取り出し、脳が死なぬように細工した培養槽に入れる。直接、神経細胞を外部から操作する。そしたら、そこには通常の人と同じような意識が生まれるのか。でしょう。もうなんか飽き飽きするくらいじゃないの？ パンピーだって識ってるでしょ、こんな哲学ネタ」

くだんの思考実験は水槽のなかというアイデアがよかったのか、中国語の部屋のような思考実験と違い、人口に膾炙しているたぐいのものだ。もっとも、シュレインガーのネコほどに敷衍してはいないのは実情に違いないが。

「彼らには、脳すらない」

押し殺したような声でバベッジ。

「そうね——」

「じゃあ、フェイクの初華がフェイクの春彦を殺したのを、どう考

えるかい？」

「殺すつてのはおかしいのじゃない？ フェイクはデータよ。復元

――」

「警察無線を聞くところによれば――」

「え？ 復号できたの？」

警察無線は筒抜けされぬようにパターンを数年ごとに変えている。

「まあ、聞け。高嶋のPCは完全に壊れていたそうだ。彼女たちは死んだんだよ。――『うそつき！』ってどういう話だったのか？」

「ロボットが人間の為に嘘をつき続ける話。危害を加えないためにね」エイダはつつけんどんに言い放った。「っていうか――バベツジ」アッシュブロンドをぞんざいな手並みでかきあげると、続ける。「フェイクには記憶情報をスキャンする機能はないでしょう？ 確かに――初期状態でも一般的な大人と同じだけの語彙、知識は持っているけれど」

「ヒントはオープンソースと彼女の専攻」

「ハア？」

「テスト中だって言っただじゃないか」

「サービス開始っていったような？」

「聞こえない」

「……そればかりね、あんた……」

今回はけたぐるのは堪忍してやるエイダだった。

ケーススタディ三 星になった少女

ケーススタディ三 星になった少女

一

薄い膜の向こうには何があるのだろう。

空はどこまでも広がっているような気がするけれど、実際はともとても薄い皮膜の中でぼくたちは生きている。空の果ては結構近くにあるもんだ。

地球からすれば、大気は皮膚のようなもの。それも皮膜だ。膜というレベルに過ぎず、あつぽつたい足の皮とは違う。

ぼくらは皮膚に湧いた微生物。

生存圏のすぐうえには、電離層やら成層圏やらがあつて、そこには生命は棲めない。熱圏までいくと宇宙はすぐそこにある。

人間なんてちっさい。

個人はもつとちいさい。

仲間もくそも——あつたもんじゃない。

ガイアは笑わない。地球は——神様じゃない。ゆりかごでもない。赤子のために、子守唄は決して歌わない。

何も語らず、何もせず、ダークマターのうえに浮いている。

それこそ——どこが終点が解らない宇宙の中にぶかぶか、漂っているのだ。

月のうえには——ニール・アームストリングの残した足跡がいまもきれいさっぱりと、残っている。

That's one small step for a man,
one giant leap for mankind.

『これは一人の男の、ひとつのちいさなステップだ、そして、人類のための偉大な跳躍だ』と彼は言ったのだ。

彼はどんな気持ちで、この言葉をいったのだろう？

ぼくは彼じゃないから、識らない。

すこしだけ思うのだけれど、彼はちよつとだけ傲慢だったんじゃないかな、と感じる。だって、自分が偉大だって吹聴してるじゃない？

まあ、彼は初めて月面に至った人間だし、偉大なことは偉大だ。

それは確かで、疑いようのない事実なのだけれど。きっと、彼に憧憬をいだき、アストロノートになろうと思った人もそれなりにいるのじゃないかな。

月に彼の足跡が半世紀近く経っても残存しているのは、月に大気がないからだ。

大気のない場所はそうそう風化しない。着陸船もさび付いたりしない。人類が減んでも永遠に近い時間を、そこに刻み続ける。億年後の未来に——誰かが見つけて、首を傾げて、それから、笑うかもしれない。

人類のことを異星人に伝えんとした、ヴォイエイジャーのゴールデンレコードはいまごろ、宇宙のどこをさまよっているのだろうか？

一番近い恒星までの距離は四万光年。

それまで人類は跋扈していますか？

タイムマシンでもないとは解らない。そして、ゴールデンレコードそれ自体がタイムマシンみたいな——いや、タイムカプセルだ。タイムカプセルは時間のとまった世界を、時間の流れている世界へ届ける。

ゴールデンレコードにはいろいろなデータが封入されているけれど、そのなかには、いくつかの死語が含まれている。

アカディアン、スメリアン、アンシエント「グreek、リングア・ラティーナ。全部、ヴォイエイジャーが飛んだときには死んでいた。誰も喋らない。パピルスと粘土板と石版と——銜学する人だ

けが語る。そんな言葉。

英語も日本語も収録されたが、果たして、四万年後に誰が喋っているだろうか？

列島が四万年後の世界地図からなくなっている、ぼくは驚かない。なにが起こるか解らないのが世の中で、一寸先は闇——とはよくいったものだ。

言葉は流転する。

thy ilcan drehton tha hergas
on Eastenglum ond on Nor&eth;
hymbrum Westsexna lond swi&
amp;eth;e be tha em su&eth;
sta&eth;e mid staehlhergum
ealra swithust mid tha em aecu
m the hie fel a geara aer timbr
edon.

Alfred's War With The Danesより

現代英語にすれば、

In the same year the Danish a
rmies in East Anglia and in No
rthumbria much harassed the la
nd of Wessex along the south c
oast with plundering bands, mo
st of all with the warships wh
ich they had built many years
before.

全然、違う。似ても似つかない。

ゴールデンレコードを拾ったエイリエンは、人類に——どんな感慨をいただくのだろうか？

この問いはきつと、とても考えても詮無いことなのだろう。

ドレイクの方程式や、フェルミ「パドックス」を持ち出す人がいるかと思えば、その裏側では、SETEI——Search for Extraterrestrial Intelligence というプロジェクトも大真面目におこなわれている。この計画の名称を直訳すると、『地球外知性の探索』だ。

SETEIは電波望遠鏡が受信した電波を解析したり、素数——自然界に素数の連続は存在しないという同意のもと——を発信したりしている。いまのところ、成果らしい実績はなにもあがっていない。それでも——とぼくは思う。

哲学的な問題を考えるよりも、ずっとずっと現実的な命題なんじゃないか？ って。

人は、ふだん、すごく卑近なことばかり考える。

ルワンダ内戦は遠い国のお話でしかなくて、何万人が死のうと日本人は気にしない。アフリカの小国がどうなろうとそんなことは関係ないのだ。

アメリカがおかしくなったら、それは大事だし、北朝鮮がテポドンを飛ばすのも大問題だ。されど——そのテポドンにしたところで、東部ユーラシアから離れたエウロパイキー（欧州人）には、たぶん、どうでもいい話なんだ。USAがでしゃばるのは、既得権益。そして、正義のため。利のないところに人は行かない。

ニグロの死よりも、ニッシンのカップメンが99円よりも高くなることの方がずっと問題で、重要なのだ。ぼくだって——そう思うもの。

そして、エイリエンの問題はそれらのどれからも離れている。

目の前にあるのは果たして本当にリングか？

あなたは夢を見ていて、何もないのではないか？

実は世界はどこかのコンピュータ上のシュミレーションでしかない

くつて、あなたの幸せも苦痛も、情愛もすべて、ゼロと書で記述されているんですよ？

そんなの——答えはでない。

政治的なこと、宗教的なこと、現実生活のこと、未来とか夢とかいう建前で装飾された将来のこと、そんなこととは一線を画した場所に、宇宙はある。だから、ロマンがあつて、太古から人間は空ばかり見てきた。

スメル人の主神はアンという。空もアンという。

中国神話では、神様の名前がない。天、という。

たいていの神話はいつも、空と海の創世から始まる。

空への憧れは、人に鋼のツバサを与えた。

ぼくは、イカロスになつてもいいと思う。太陽に近づけるのなら——そのあとに墜落死が大口を開けて待っていても、ぼくはきつとためらわない。もちろん、蠟でツバサを作ったりはしないし、そのんなもので空を翔ることなどできないのは百も承知だけれど。兵器だったV二号の後裔でガガーリンは地球が青いことを知らせてくれた。

人を殺す飛翔体が、人のロマンを乗せる箱舟になる。とても——素晴らしいことだつて、ぼくは思う。

「とばしますか」

ぼくはコンクリブロックから腰をあげた。

きょうは考えことをし過ぎた。

すっかり身体が冷えている。ぶるつと身震いをした。それから、砂粒のついたズボンをおざなりにはたいた。

囁目するは、大海。月が照らす群青色の水面。みなも

寄せては返す潮。潮騒が間歇的にやってくる。

『えっと、次のリクエストです』

ラジオの音だ。

コンクリブロックのわきつつちよには携帯式ラジオがある。ノイズまじりであり電波状態はよくない。

夜間の浜には誰もいない。誰もいないのは別にいいのだけれど、潮の音色しかないのはどこかわびしい。だから用意したラジオだった。

『東京都にお住まいのアメンボさん。グスタフⅡホルストの惑星組曲から金星、平和をもたらすもの、です』

珍しい。リクエストにクラシックとは。

しかし、おあつらえ向きじゃないか。

だって、ぼくはこれからロケットを飛ばすのだ。

とはいっても、まさか宇宙まではとどかない。なんてことはないモデルロケットだ。でも、数年前からすれば格段に進歩しているのは確かなのだった。

砂浜に立てかけた発射台へとぼくは向かった。

二

宇宙少年団という組織がある。

ぼくがその集まりに参加したのは、宇宙が好きだったわけでもなく、ロケットが好きだったわけでもなく、単に父さんの知り合いの進めだった。ちっともノリ気じゃなかったし、だったら家でゲームでもしていたと思うのが本音だった。

父さんに車に乗せられたときは——けっこう、憤慨していた。お気に入りのRPGの世界に耽溺していたのに、それを中座させられたのは幼いばかりにとつて、恨みと怒りをいだくに足る十分な理由として機能した。

入団式に際して、ぼくは宇宙服のスキントイトみたいな団衣をもらった。衣装は黄金色に輝いていて、なんだかケバケバしいと感じた。

更衣室で着替えてから参加する手筈になっていた。

入団式に参加しているのは中学生が多かった。もしくは小学生。

ぼくは小学六年生だった。そして、大方の予想はついていたのだが、ほとんどが男子だった。丸刈り頭がパイプ椅子のうえに整然として並んでいるのが滑稽だった。

オトコノコばかりの理由には、おおよその見当がつく。

女子というのは星占いは好きなくせに、実際の星の問題になると凄くシビアな見解を持っている。

「あんなの石ころでしょう？」

そう言う。

ぼくも——ぶっちゃけ、そう思っていた。
でっかい石ころ。

宇宙空間をぐるぐると回っているでっかい石ころ、そんな風に思っていた。たまに、地球につつこんでくる危ないヤツ。木星がガス惑星で、ちつとも石ころじゃないことなんて、識らなかったのだ。

パイプ椅子に座って、大人たちのお話を聞いた。

壇上には土星をかたちどったと思われる団旗がさがっていた。

肝心の講演の内容はあまり憶えていない。

憶えているのは、松本零士がいたことだった。

彼は宇宙少年団の顧問だか、なにかだった。『戦艦ヤマト』の作者だから、適任かとは思った。しかも、彼は団誌にもたった二ページだけれどマンガを描いていた。哲夫っぽいキャラクタとメートルっぽいキャラクタが果てることない問答をしていた。

トレードマークの帽子を被った老年の漫画家。

彼はサインをよく描くといわれていて、新しい団員の人数分だけサインを描いてくれた。それをもらったぼくはそこそこ嬉しかった。そこそこであって、かなり嬉しかったというのは程遠かった。

世代的に鳥山あたりだと小躍りしたと思う。

だけど、漫画家のサイン色紙なんて始めてもらったし、実際のところ、『スリーナイン』も『キャプテンハーロック』も読んだことがなかったけれど、そんなことはまったく問題がなかった。大御所のサイン——それは金糸玉条のようなものだった。

ノリ気ではなかったけど、式が終わってからはずいぶんノリノリだった。気分がハイだった。宇宙へも行けそうな気がした。馬鹿な十二歳がそこにいた。

そして、ぼくは同期入団の一人が女の子であることに気付いた。すぐにそれと解らなかったのは、彼女がショートカットだったからだし、背が高い割りに身体の凹凸がなかったからだ。スキータイトを着てしまっても、解らなかったのだ。彼女はおそらく中学生だった。

小学生なら、身体つきがオトコノコと大差ないのも納得だが、中学生にして——それはありえないのだった。

ぼくは彼女に話しかけた。「ねえ、お姉さん」

「なに？」

彼女は首を回した。

ぼくは言葉に詰まった。

話しかけてみたはいいものの、話すべき内容なんて考えてもいなかったのだ。

お姉さんは目を白黒させた。

「私は蜷河瀬瑠にながわぜ。よろしく、ね」

ぼくの背筋が勝手に伸びた。

瑠は——たしかに女らしくはなかったが、見てくれは悪くなかった。とくに、いま目の前にあるようににはにkindのように微笑むときがいつだって、彼女の最高の表情なのだ。初めてこのとき、ぼくは彼女のその笑顔のフックを浴びて、マットに沈みかけ、だから、沈まぬように背筋を伸ばした。

「きみ、名前、いいなよ」

「あ、うん」

「常識——だからね。礼儀だよ。礼儀」

母さんがいいそうなことだな、と頭の片隅で思った。

けれど、母さんにいadakような反感の情は湧くことはなかった。

ぼくは——たぶん、むかしからずっと単純、単細胞にできていた

のだろう。

ぼくは緊張していた。声を上ずらせながら、なんとか自己紹介した。「お……音無郁人」

「よろしくね、郁人くん」

蛭は手を差し出した。ぼくたちは握手を交わした。

午後は入団式のあったセンターから近くにある科学館へいくことになった。

科学館にはプラネタリウムがあるのだ。

さして都会ではなく、かたや、田舎とも言いがたい微妙なこのあたりには唯一のプラネタリウムであり、唯一の科学的な展示のある場所だった。

意味のないハコモノはたくさん立っているけれど、行政はあまり、科学的な事柄に関心はないようだった。理科離れというのが問題らしいので、つくっても意味がないと踏んでいるのかもしれない。

貸切バスで、ぼくと蛭は隣同士に座った。

保護者たちはとくに帰っていた。父さんは夕方に迎えに来るかと言に残し、帰ってしまった。

「郁人くんは——宇宙が好きなの？」

ぼくは首を横に振り、それから、父さんに強引に連れてこられたことをなにひとつ包み隠さずに開陳した。

蛭はくすくすと含み笑いをした。

「そんなもんなのかな？ まあ、動機ってなんでもいいよね」

「蛭は、好きなの？」

こまっしやくれたガキだったぼくは、彼女に敬称をつけなかった。また、彼女も咎めなかった。おそらく、弟のように思われていたのかもしれない。後日、識つたのだが、彼女は一人っ子だった。

「月の石って識ってるかな？」

「そんなアイテムあったよ。確かね——」

最近プレイしたRPGにそんな名称のアイテムがあったのだ。

「もう……。ゲームじゃないよ」

「違うの？」

「ぜんぜん、違う。ほんものの、月の石だよ」

「そんなのがあるの？」

「それがあるんだなあ」得意げに蛭は口の端を吊った。「アポロ計画って識ってるでしょう？ あ——スペースシャトルじゃないよ？」

「月へいったんだよね」

某チヨコのかたちに似ていることをぼくは識っている。

「そのとき、持ち帰ってきたんだ。十七号なんて凄いよ、一〇一キロも持ち帰ってきたんだからね」

十七号と聞いて最初に浮かぶのはDBの改造人間だったが、そのことはおくびにも出さず、ぼくは素直に感嘆した。実際、ぼくは感動していた。宇宙から一〇〇キロもの石つころを持つてくるというのはきつと大変なことなのだと、無知ながらも解らないほどぼくは愚かではなかったのだった。

「すごいんだ」

「ソビエトのルナ計画つてのも——ってこれはいつか。どうして、私が宇宙が好きなのか、って話だったね」

蛭は居住まいを正した。

すらつと通った鼻筋を彼女は自分の指先でなでつける。

「何の変哲もない石ころなんだよ。月の石ってさ。国立博物館（ナショナルミュージアム）にあるんだけど、ほんと、石ころなんだよ」彼女は遠い目をした。「だけれね、その表層にはマイクrokレーターが風化せずに残ってるんだよね」

「マイクrokレーター？」

「ちっさいクレーターのこと。宇宙にはね、大気がないから風化しないんだ。つまりね——単なる石ころみたいだけど、そこには悠久の何かがあると思う。それってさ、なんか、ワクワクしないかな？」納得はしていなかった。けれども、顔を寄せてくる蛭には言い知れぬ気迫があった。ぼくは頷かずにはおれなかった。

頷くと、蛭は顔を引つ込めた。

「よろしい。いい子いい子」

頭に柔らかいものが触れる。蛭の掌だった。

彼女はぐっしやぐっしやにぼくの頭の天辺をなでくつた。

これからが凄かった。

科学館につくまで、マシンガンのバレットのように打ち出される講釈にぼくは晒されることになってしまった。

月のクレーターの名前に際しては、政治家、宗教家、軍事関係者の名前はNGだとか、月の引きこす潮汐の話だとか、小学生の知識では太刀打ちできない話題がばんぽん出た。

ぼくはただただ、目を回した。

そして――蜷河瀬蛭というオンナノコをとても尊敬した。

三

ぼくたちが意外と近所に棲んでいることにお互い気付くのに、長い時間は必要ではなかった。

いつも通っているゲーセンの自動扉のまえに蛭の姿を見つけたのは偶発的だったにせよ、それは幸福なことだった。

「郁人くんじゃない」

ぱつと彼女は華咲くような表情をぼくへ向けた。

彼女は私服だった。スキニタイト姿ではない彼女を初めて見た。

団の集まりで会ってはいしたが、そのときはいつもスキニタイトを彼女は着ていたのだ。

宇宙大好き人間にしてはカジュアルな格好だった。少なくとも、ユニクロじゃなかった。

とても普段、宇宙について語っているとは感じられず、どこにでもある星占いに思い馳せるオンナノコが目の前にいる。

母のお仕着せのままに服を選ぶことなど識らなかつたぼくは、蛭

が短いスカートを履いていることと、袖の膨らんだ上着を着ていること意外には解らない。とりあえず——眩しかった。頭上で照っている太陽なんか翳^{かす}んだ。

どこにでもいるオンナノコじゃなかった。

ここにしかない、オンナノコだった。

「誰か待つてるの？」

「ははん。カレシでも待つてると、そう思ったかな？」

「そうじゃないけど……」

「マセガキなんだね。ま——それはおいとこう。えっとね、誰も待つてないよ」

「じゃあ、何してたの？」

「単なる息抜き。ゲーム中に息抜きつてのも変な話だけど。郁人くんさ、もしかして——私がゲームをしない人とでも思ってた？」

「思ってた」

だって蛭はゲームが嫌いそんなことばっかりいうからだ。ぼくがゲームの話題を提供しようとすると、いつも顔を顰めるのだ。

「グラディウスしない？」

「あたらしいやつ？」

「そうそう。グラディウスⅤ。復活！ だつてさ」

「自信あるよ」

当時のぼくは、ほかのガキンチョに漏れず、ゲームとあらば——それが学習ゲームであつてもだ——熱心になるタイプだった。

ぼくは腕まくりをした。

蛭が手を引いた。

「それじゃ、勝負しよう。どこまでいけるか」

不敵に彼女は笑うのだった。ぼくはこの笑顔の正体をすぐに知ることになる。

結果をいえば、けちよんけちよんとかいいようがなかった。

ぼくがいくたびもコンティニューしてやっとかさクリアしたのに、

彼女はワンコインでクリアしてしまった。すくなくとも——コンテイニューしてもクリアできない連中がぼくの周りでは大半だったので、とても打ちのめされた。

「自信あつたんじゃないの？」

にまにましている。ぼくはおそらく、膨れっ面をしていたのだろう、おかしそうに蛭は馬鹿笑いをして、ひいひいお腹を押さえた。その所作にますますぼくはムスツとする。

「ごめんねえ。お姉さん、強くて」

「じゃあ——」ぼくは目でほかの筐体を示した。

それは当時流行していた格闘ゲームで、STGでは敗北を喫しても、格ゲーなら——と思ったぼくは浅はかでしかなかった。

こちらもボコボコだった。

完全ゲームだった。

彼女のキャラクターの体力ゲージは満タンのままだった。

キャラクターの体力ばかりではなく、ぼくの精神力ゲージがゼロだった。

悔しかった。ぼくはわんわん泣いた。

ワイン持ちしたスティックをぐりぐりまわしながら、泣いたのだ。

「蜷河瀬さん。ごめんなさいね」と母は頭を垂れつつ、蛭に言った。「いえいえ。郁人くんのお母さん——むしろ、私が大人げなかったといえますか。そんな感じなんですよ。悪いのは私ですよ。こちらこそすいません」

「しっかりしてるのね。この子と三つしか変わらないのに」

母は嘆息した。

そして、ぼくを睨みやがったので、こっちも睨んでやったが、泣き腫らした真つ赤な目ではダメだった。

母の眼差しがやんわりした睨みからジト目にシフトしただけだ。ジト目は余計にぼくの神経を逆撫でする。

「三つの差は大きいですよ。とくに——私たちはまだティーネイジ

「ヤーも前半ですから」

「それにしても——近くに棲んでいたのね」

蛭は愛想笑いで応え、

「そうですね。私も知りませんでした。なんでしたら——そうですね、夫婦水入らずをしたいと思ったりなんてしたら、郁人くんの子守、しますよ」

「あらあら。嫁さんに欲しいわ」

あまりジョーダンには聞こえなかった。

教会の鐘が鳴った。

新郎と新婦がヴァージンロードを歩いているところで、ぼくの妄想を蛭の言がかなぐり消した。

「郁人くんは弟みたいなものですよ」

「そうね。こんなハナタレガキンチョは対象外よね」

「十年後は解りませんよ」

お世辞モードだった。

普段、蛭はこんなことをぼくに言わない。

「晩御飯、食べていかない？」

「そうですね。お邪魔します」

てつきり断るのかなと思っていただけに意外だった。

蛭はぼくにだけ解るように小さくウインクした。

それが何を意味しているかこのときのぼくにはさっぱりだったが、夕飯の後にそれは判明することになる。

夕飯はスキヤキだった。スキヤキなんて年一回あるかないか解らないのに豪勢なことだと思った。

父が帰ってきてから夕食はスタートした。

蛭は勘違いをしていた。

父のススメでぼくが少年団にはいったのは事実だったが、取り立てて父は宇宙に関心のある人物ではない。

「——をどう思いますか？」と切り出した蛭に父はあんぐりと口を開けた。卵に絡め取られた肉が唇に届くか届かないかの位置で空中

停止する。

内容はいつも、彼女がぼくに話すことよりも高度だったので、しかと記憶にない。

「ごめんよ。蛍ちゃん。俺はそんなに詳しくないんだよ」

「あれ——。そうなんですか？」

「そうなんだよ。だから——蛍ちゃんがあいつを教育してあげてくれよ」

蛍はちよつとだけ逡巡するような仕草をした。チラっとぼくを——瞥して、言った。「はい。よろこんで」

スキヤキ鍋が空っぽになって、みんなお腹を押さえてダラダラし始めた。

ソファに座ってなんとなくＴＶのお笑い番組を見ていたぼくに蛍が訊ねてきた。「プレステかサターンあるよね？」

「あるよ」

「お姉さんが郁人くんのリベンジを受け付けよう。ソフトはなんでもいいよ」

リベンジは完了した。

しかし——いま思い返すとあれはわざと負けていたに違いなかった。けれども、ガキのちっさな自尊心を快復させるのは単純なことほど効果靨面なのだった。

この日以来、ぼくらはたびたび遊ぶようになった。

ぼくが大学受験をする——センター試験の朝までぼくらの関係は続いた。

四

一口にモデルロケットといっても何種類がある。大別するならば、火薬を使うか使わないか。

ペットボトルロケットというのは火薬を使わないが、ロケットの力学的な要素をきっかりと学ぶことができるので、けっこう日本では人気だ。

ひとつには日本では火薬の入手が困難であることもあげられるだろう。

しかも、ペットボトルロケットというのは基本的にはペットボトルだけでつくることができる。

衝撃を吸収するためのトップはウレタン性のものを使用するし、ノズルには空気入れと接続するためのプラグをはめないといけないが——必要なのはそのくらいだ。

羽もペットボトルの側面を切り取ってつくるのだ。

「だからね、郁人くん。お茶のヤツはダメだっていったじゃないの」
ぼくはビニール袋に詰まったペットボトルの山を見て、それから蛭を見た。

ビニール袋に入っているペットボトルはほとんどが角ばった形状をしている。

「炭酸飲料のものがいいのよ。空気を溜めるには。そう——なんで炭酸飲料、炭酸ガスが封入されているものの形状があんな風に丸いのか、円ってというのは——」

「解ったよ。蛭」

解ったといわないと彼女の講義はとまらないのだ。

蛭は燃焼不良な顔をしたが、それ以上レクチャーしてはこなかった。ぼくはほつと胸を撫で下ろした。

「まあ、羽の材料にはなるからいいかな」蛭はぼくからビニール袋を受け取る。「それじゃ、いこうか。郁人くん」

ペットボトルロケット大会。

主催者は誰だったか識らないけれど、世の中には物好きがいるものだ。参加者もそれなりにいて、一応三桁には届いていた。もっとも、チーム参加なのでチーム数でいえば二桁になってしまいが。

大会は至って簡単。

一時間でペットボトルロケットを拵える。そして、一番とおくま
で無事に飛ばせたチームが優勝。

使える材料はペットボトルのみ。

ウレタントップとノズルアタッチメントは支給される。

道具も制限されていて、ステイプラーとビニールテープとカッタ
ー、ハサミしか使用してはいけない。

レフェリーが作業場の周囲で目を光らせているので、ズルはでき
そうもなかった。もちろん、そんなことをする気もなかったし、正
々堂々勝負するのがぼくたちの流儀だった。

なるだけウェイトを落とすし、なおかつ耐久性を落としてはいけな
い。

大会規定にあるように無事に飛ばさないといけないのだ。

ウレタントップがついていいるとはいえ、なかに水が残った状態で
落下してしまうとけっこうな衝撃になり、ペットボトルは潰れてし
まう。

水の量、匙加減もけっこう重要なのだ。

いれすぎると鈍重になり、飛ばない。

いれなさすぎると燃料が足りずに、やっぱり飛ばない。

ぼくたちはこの日のために試行錯誤を繰り返してきた。

水と送り込む空気の黄金比も完璧だった。

あとは風だ。

風は最早、運任せとしかいいようがない。

ぼくは青空に祈った。

青空を見詰めているぼくに蜚言がよってきた。「ねえ、郁人くん。

宇宙っていつてみたい？」

「いつてみたいな」

彼女とあつて約二年。このときのぼくはすっかり洗脳されていた。
すっかり学年の終わりのクラス文集の——尊敬する人の欄に彼女の
名前を書きそうになっただくらいだ。慌てて、ユーリィガガーリン

に書き直したが、それこそがぼくが洗脳完了されているなよりの証に違いなかった。

「もし、余命が一年と言われたら、私は生きたまま宇宙へ送って欲しいな」

「宇宙葬ってやつ？」

「ダメだよ。死んじやってたらちゃんと拝めないじゃん」

「確かにそうだ」

「ああ——ヴォイエイジャーのレコードになりたい」

蛍の言葉と同じくして、コールがかかった。

『蜷河瀬、音無チーム』

「あの無味乾燥なチーム名、どうにかならなかったの？」

「いいじゃない。気取ってもしょうがないでしょうが？」

ぼくたちは優勝した。

空気入力で頑張って空気を送り込みすぎて、血管が切れそうになったのは蛍には内緒だ。

五

日本にはロケット打ち上げ場が二つある。

内之浦と種子島だ。

ロシアのロケット発射基地は四国並みの広さがあるけれど、狭い日本の打ち上げ場はとても小さい。

そして、正確には打ち上げ場が二つあった、と表現すべきかもしれない。

そのころはまだ内之浦は稼働していた。

JAXAが生まれる前だったのだ。

文科省の研究所と独立行政法人、特殊法人が合併してJAXAになったのは二〇〇三年のことだ。

JAXA発足後は、内之浦はお払い箱になった。くわえて、内之浦町自体も町村合併で消えてしまった。

ぼくと蛭は、内之浦へ行った。

彼女の祖父母が内之浦町の隣町に棲んでいたからだだった。泊りがけの旅行だった。

中学三年の夏休みをぼくは彼女と鹿児島の大地で過ごすことになったのだ。ぼくは嬉しくてたまらなかった。高校生になっていた蛭は大学受験が差し迫っているはずなのに、素知らぬフリであった。飛行機が空港に降り立った瞬間、むわっとした空気がやってきた。さすがは南国だと思ったものだ。

蛭の祖父母の家に荷物を置き、ぼくらは意気揚々と内之浦へ行った。

かなり、くたびれた田舎だった。

発射場もなんだか、元気がなかった。おそらく、管制室だと思われる場所のコンピュータは古臭く、あまつさえ、アルミサッシのアクリルガラスは割れている始末だった。ぼくは幻滅した。かたや、蛭はそんな様子を見せない。

エントランスには、黒のまるにノズルが前後ろについたものが飾ってあった。

「なにこれ？」

「おおすみ、のレプリカだよ」

「おおすみ？」

「日本初の人工衛星」

『おおすみ』は小さかった。人工衛星ってのはもって大きいものだと思っていたので、またしても、幻滅した。

『おおすみ』は二十三キロしか重量がなかった。もちろん、スプートニク一号よりは小さかったけれど、エクスプローラー一号よりは大きかった。でも、エクスプローラー一号が飛んだのはおおすみ
が空にあがる十二年もまえだった。

蛭はぼくの内心を悟ったみたいで、言った。「こらこら。しょぼ

いとか思っちゃいけないぞ」

「だって……」

「あのさ、宇宙開発つてのは、軍事技術と紙一重なんだよ。ソビエトのロケット技術の発展におおきく寄与したV二号は、もともとミサイルだったわけじゃない？ それに、NASAは予算の半額が軍事費なんだよ。中国やフランスも人工衛星を飛ばしたけれど、全部根っこには軍事がある」

蛭はこんこんと話した。

「しかもおおすみを飛ばしたL-4Sは無誘導式なんだ。誘導装置に関して、当時の共産党から軍事転用へのクレームがついちちゃったからね。それって、すごくないかな？」

「だね」

誘導なしに水平軌道へもっていくとすれば、機械仕掛けになるのだろう？ エンペデットシステムが車の燃費制御に多大な成果を与えたように電子制御なら簡単なことも機械制御になると難しい。

「もっとも——日本の宇宙開発は特段、遅れちゃいないんだよ。世間はそう思ってるみたいだけど。ひとつにはさ、価値のなさがあると思うんだ。気象衛星や通信衛星には意味があるけど、宇宙を開発することに、ふつうの人は意義を感じない。軍事です。お国の為です、だって言ったほうがみんな納得する。結局さ、憲法九条とかいうけど——実際、誰も自衛隊がなくなることなんて望んでないでしょう？」

蛭は平和主義者だった。

だからこそ、現状に納得がいかないのだと思う。

「ま——そのせいで三菱重工の手垢がついてるんだよね。ボーイングとロッキードの争いみたいなのは無いんだ。そこは残念かも」自嘲した。「それじゃ、いこうか。むこうに発射台があるみたいだから」

図らずも、くだんの人工衛星『おおすみ』が消滅した日時はJAXA発足の二〇〇三年だった。日本の宇宙開発がパラダイムシフト

したことを示していたのかもしれない。

ぼくたちはロケットを載せるトレーラーへ向かって歩き出す。

たくさん写真を撮った。

ほかの観光客や、職員に頼んでもらって、ぼくたちは同じフレームのなかに収まった。

夏休みの大半は大隅半島で過ごした。

いつまでも——この時間が続けばいいとぼくは思っていた。

蛭にとっては祖父母の家に男友達といったことだけのことだったかもしれないけれど、ぼくは違った。

南国で見た花火や、アクマキという変な食い物や、ほんとうに火山灰が降って空気が汚れてしまうところとか——ぼくにとっては蛭との大事な大事な思い出の時間が醸成されていた。

六

発射台からモデルロケットは飛んでいった。

シュバっという爽快な音がした。

プロペラントには黒色火薬ではなく、コンポジット燃料を使っている。ハイパワーロケット用のものでスペースシャトルにも同じものが使用されている。つまり、小さいだけで決してニセモノじゃないってことだ。

高度がぐんぐんあがっていった。

そして、小さくなって、見えなくなった。ノズルから立ち昇る煙も——火も、まったく見えなくなった。

しばらくして、夜の帳の中に光点が見えた。

パラシュートが開いたのだ。

実際のロケットとは違い、モデルロケットは回収前提で発射する。あくまで、ロケットを飛ばすことが目的だし、ロケットの原理を学

ぶことを目的とした教材でもあるのだ。無駄にはいけないのだ。もつとも、今回のヤツは筐体からぼくが自作したものだけれど。ぼくは光点目掛けて走り出す。

ペイロード——本来なら人工衛星などを積載する場所——にパラシュートがつめてあるのだが、このパラシュートにぼくは蛍光塗料を塗っておいた。夜間でもきちんと回収できるようにとの配慮だった。

とつぜん、大風が吹いた。ぼくは焦った。

海に落ちてしまいかもしれない。そしたら、回収が困難になってしまう。パラシュートが開く前なら、そこまで大きく軌道がそれたりはしないがパラシュートが開いた状態では煽られるがまま、なすがままだ。

だったら、最初から海辺で飛ばさなきゃいいと思うかもしれないけど、それは——砂浜で花火をする理屈とおんなじだ。

モデルロケットは火薬をつかっているのだし、それなりに音がする。爆発の危険はないけれど、民家に落ちたらえらいことになる。それに何百メートルも飛ぶから公園じゃ無理だ。日本の公園は狭い。殊、都会ともなれば、猫の額だ。

パラシュートの光点を見あげながら、海上に落ちないことを祈った。

祈りを神様が聞き届けたのか、ロケットは波打ちぎわに落ちた。

おかげで濡れてしまった。願いを聞き届けるなら、もつときちゃんと聞いて欲しいものだ、と悪態をつきながら、ラジオのある発射台へと戻った。

「あれ？」

ラジオの傍に人翳があった。

この時間帯に人と出くわすのは初めてだった。

しかも、こんな時間——いまは深夜二時だ。

ロクな人間じゃないはずだ、と自分のことを棚にあげてぼくは警戒しながら近寄った。

その人物は外国人のようだった。銀髪をしていた。背の低い女だった。夜風で冷えるだろうに、薄着だった、

彼女はぼくに気付くと流暢な日本語で言った。「こんばんは」

「こんばんは」

深夜に浜辺をほつつきあるいているような人物には見えなかった。年齢は——よく解らなかった。十代前半かもしれないし、二十代かもしれない。ようするに年齢不詳だった。

「なにをしてたんですか？」

ぼくは無言でモデルロケットを見せた。

彼女はきちんと理解した。

「なるほど。ミサイルを飛ばしていたんですね」

訂正——理解していなかった。

「ロケットだよ。ロケット」

「ああ、ロケットですか。でも、ロケット砲つてのもありますよ」

そういえば、英語では飛び道具は何でもミサイルということを出した。鋸もミサイルなのだ。誘導兵器だけをミサイルと呼ぶわけじゃない。

「そういう話は嫌いだな」

「そうですか。平和主義者なんですね」

女は馬鹿にする風でもなく、感心する風でもなく、ただ言葉を告げた。

「きみ、こんな時間になにをしてるのさ？」

彼女は質問には応えず、

「きみじゃなくて、私はエイダです。よろしく」

名前をいわれたら、こちらも言わないわけにはいかないだろう。一応、礼儀だ。ぼくも名乗ることにした。

「ぼくは郁人」

「イクトって有人って書くんですか？」

「それはアリトだと思うよ」

「なるほど。ロケットを飛ばしているんですから、有人飛行とかし

たいのかなあって」

「さすがに、名が体を現すってこともないよ」

「そうですか。私の場合は——名は体を現してますが」

「ふうん」

エイダの名前が何かの偉人と被っているのかどうか、ぼくは識らない。それにどうでもよかった。

今日の発射は終わったので、発射台を片付けにかかった。

海水浴に不向きな浜なので放置したままでもよいと最初のころは思っていたのだが、それは間違いだった。近所のワルガキというのは、なんにでも興味を示し——しかもタチの悪いことにその興味は破壊へ向かう。

いきようようと翌日、浜辺に行ったら、発射台のステンレスフレームがひしゃげていた。それ以来、ぼくは多少重かるうとも、帰って帰ることにしているのだ。二度と同じ轍を踏まないのが賢い。

需要と供給の関係でロケット機材はけっこう高い。貧乏学生の財布は大ダメージだ。

ぼくが発射台のネジを外しているあいだも、エイダは去ろうとはしなかった。

「そういえば——、ラジオからぴったりな音楽が流れてましたよ」

「グスタフ」ホルストだろう？」

「ええ」

「金星だったかな？」

背中越しにぼくは応える。

ぼくが惑星組曲を識っているのは、それが惑星に題材を撰っているからで、とりたててクラシックに篤いわけじゃなかった。

「平和をもたらすもの、ですね」

「むかしは——金星人も攻めてきたのにな。最近、地球はめっきり平和だな」

「そうですね。アダムスキーが沙漠のなかで、会いましたね。ま、彼のことでウソなんでしょうけど」

ジョージ・アダムスキーと金星人の話を識っているなんて——ぼくは嬉しくなった。ながいあいだ、ぼくはこの手の話題を話せる相手を欠いていただけに、ひとしおだった。

エイダはけっこう、話のできる相手なんじゃないかと思った。

ここで、ひけらかすプチトリビア。

「その金星人、オーソンっていうんだぜ」

「それはおもしろいですね」さすがに、金星人の名前までは識らなかったようだ。感心した様子でしきりにうなづきつつ、エイダは続けた。「アメリカでパニックを起こしたラジオ劇『火星襲来』をおこなったマーキュリー劇場の主催者がオーソン・ウェルズですね。オーソン・ウェルズは金星人だったんですね。そいつはおどろきものの木、二十世紀です」彼女はさもおかしそうに笑った。

つまらないダジャレはスルーだ。

「マーキュリー、ウェーヌス、マーシヤンとそろい踏みだな」

「それもそうですね。水星は——ツバサのある使者ですよ。火星は——戦争をもたらすものですね」

「ホルストは『宇宙戦争』でも読んだのかな？」

「さあ、どうなんでしょう」

惑星組曲の初演は一九二〇年。『宇宙戦争』の発表は一八九八年だ。時期的にはそんぶんに考え得る可能性だ。

「火星といえば『宇宙戦争』だけど、水星といたら『太陽の篡奪者』かな」

「後半の知性とはなにか？ が興味深いですね」

「どうやら、彼女とぼくの着眼点は違ったようだ。」

ぼくはむしろ、前半部——主人公が水星の観測をしていて、不思議な現象を目撃するあたりから、水星にハニカム構造の構築物を発見するあたりまでがキモだと思っている。登場するエイリアンは水星人じゃないけど。

「個々の——パーソナルな生命体をノードのように扱う——集合知性とも呼ぶべきでしょうか。超個体などという仮説もありますが一

「——」
「ちょっと待ってくれ」

手を差し出す。待ての合図。

「どうしました？」

「生物は門外漢なんだ」

「そうですね。それは残念ですね。もっとも、いま、私は生物の話はしていませんけどね」

「え？」

「まあ、こつちの話です。たまにはいいものですね」

エイダは目を細めた。

遮るもののない海原から噴いてくる風に銀髪が煽られる。

「なにが？」

「こうして、潮風にあたるのも、ってことですよ。私は室内にいることが多くって」

「だけど、こんな広く思える世界もちっぽけなんだぜ？」

「そうですね。ミルキーウェイには——」エイダは天空を仰いだ。

民家の明かりも街灯も届かない夜空は星がよく見える。天の川が煌いていた。「——たくさん、地球のような場所があるんでしょう」

「それがロマンだよ」

「なるほど、ロマンですか。男つてのは、好きですね。そういうの」

「はは。でも、違うんだ。ぼくに宇宙への興味をいだかせたのは、女の子なんだ」

「『太陽の篡奪者』の主人公のような？」

くだんの小説の主人公は女性だ。エイリアンに会うためだけに、エイリアンの謎を識りたいがために全てを犠牲にする人物だ。

「いや——ちょっと違うかな。でも、彼女は宇宙へ行きたかったんだ」

「彼女を——連れて行きたいんですね」

「そうだよ」

エイダの顔に一瞬だけ憫笑が走った。ぼくはそれを見逃さなかつ

たが、彼女はすぐに背を向けてしまった。

背中を向けたまま、彼女が言う。

「いつも、ここにいますか？」

「たいていは」

「解りました」

それだけ言って彼女は堤防を越えていなくなった。

七

センター試験の一週間くらいまえに、大学生になっていた蜷が帰ってきて、肩をいからせながら、ぼくにつきつけてきたのは交通安全のお守りだった。

「学業祈願じゃないの？」とぼくは言った。

「まさか。学業つてのはね、菅原道真にお願いしてもダメなんだ。いい？」ずい交通安全のお守りをつきだし、強引にぼくに握らせた。「でも、交通事故はいつ起きるか解らないよ。だから、交通安全のお守り」

「そうかもしれないね」

「そうかもじゃなくて、そうなのさ。じゃあ、頑張つてね」

「うん」

ぼくは彼女と同じ大学へ進学する気満々だった。

それはとてつもなく困難なことだった。

蜷河瀬蜷は——勉強ができたのだ。それもそうだ——やたらめつたら、小難しいことをレクチャーするのが好きなんだから、学ぶことは彼女にとって面倒事じゃないのだろう。

担任に「無理」といわれ、ぼくは却って奮起した。

合格圏内だった。

ぼくはお守りを握り締めて受験会場へチャリを漕いだ。

「こんばんは」

発射台を準備しているとエイダが姿を見せた。

彼女は昨晚と同じ格好をしていた。

「きょうは——あなたにあげるものがあります」と彼女は言った。

そして一枚のCDROMを手渡しされた。

そして、彼女はすぐに帰ってしまった。

翌日、ぼくはロムをパソコンに突っ込んだ。

説明書を読んだ。

なかのプログラムはフェイクというらしかった。

フェイクの初期設定の仕方

一、実行ファイルを選択します。

一、初期設定タブをクリックします。

一、フェイクに与える容貌のところに元となるファイルのアドレスを入れます。

一、フェイクに与える音声のところに元となるファイルのアドレスを入れます。

一、最後にフェイクの精製ボタンをクリックします。

注意・一度設定したら削除はできません。

元となるファイルについて

一、容貌に関しては、動画、静止画、問いません。また、想像上のものとしても、結構です。但し、画像が荒い場合やあまりにもデフォルメが過ぎたイラストなどの場合、不都合を来す恐れがあります。

一、音声に関しては、なるたけノイズがないものが好ましいです。雑多な人物の音声が入っている場合も、特定の人物の音声だけをスキャンする機能がフェイクにありませんので注意してください。

——つまり、蛍を再現できるわけだ。

彼女の写真はたくさんあるし、一緒に撮ったビデオには彼女の音声が入っている。

蛍は宇宙へいきたがっていた。

フェイクを使えば彼女を宇宙へつれていけるかもしれない。

だけど——ぼくは首から吊るしたお守りを握り締めた。ジャリっという音がしてしまい、慌てた。中身を開く。中身は——無事だった。少し、砕けてしまっていたけれど。

ぼくは首を振った。

このロムはエイダに返そう。

蛍はきちんと——まだ——生きているのだから。

三日連続でぼくのまえに現れたエイダはにこやかに告げた。「どうでしょう？　気に入ってもらえましたか？」

「返すよ」とぼくが言つと、彼女はきよとした。

「どうしてですか？」

「ぼくには要らないよ」

「彼女の代わりに宇宙へフェイクを送ればいいじゃないですか」

「どうして——蛍が死んでいるって解ったんだ？」

エイダは言葉につまったようだった。「あなたの話し振りでですよ」初対面の人間に見抜かれるなんてぼくも大したことはないものだ。ロムを彼女につきかえすと、ぼくは彼女に交通安全のお守りを見せた。

「このなかに蛍の遺骨が入っているんだ」

「……骨、ですか」

「うん。火葬場で——失敬した。ぼくはさ、これを宇宙にあげたいと思うんだ。それは彼女の本意じゃないけど、宇宙の一部になれるかもしれないだろう?」

「そうかもしれないですね」

言つと、エイダはラジオを切った。

「なにをするのさ?」

「星をみましよう」

エイダは手にストップウォッチを持っていた。

「話すのも禁止です。ジョン・ケージの『四分三十三秒』。沈黙の音楽です」

言うがはいか、彼女はストップウォッチのボタンを押した。

ぼくらは黙って四分三十三秒のあいだ、宇宙を見た。

蛍の愛した世界を——見た。

エピソード

エピソード

オーガスタ「エイダ」ラブレスには一風変った性癖があった。

アナルファックが好きだったり、食糞趣味がやめられなかったりと、人には一つくらい、おかしいところはある。インダストリアルな産品であれ、全てが全く同一ではない。あくまで商品価値を失わない程度の個性——誤差として処理されるだけだ。だから、人間ともなれば十人十色になるのは必然といえる。

彼女の性癖はともではないが、ひとさまにいえたものではなかった。

実に変態的だった。なおかつ、実にきもいものだった。そして、そのきもさは本人が一番よく識っていた。だからこそ、バベッジのいない時間を選んでことに及んでいる。

彼女はひたすらにチラシの裏側にエンピツを走らせている。針のように尖っていた先端がぐんぐん磨り減り、その代わり、またたくまに紙面に現れるノード木。その姿は、ユダヤ密教に登場するセフィロトの大樹さながらだった。枝にぶらさがったノードのいくつかを選び出して、黒く塗り潰す。

「うふふふ。うふふふふ」

奇怪で気の触れたようなものがあがる笑い声を口からダダ漏れにして、猛然と塗り潰したノードとルートノード間の距離を数え始める。

「 Σ 、 Σ 、 Σ ……」

塗り潰したノードの数と各自ノードの持つ距離を上記のクラフトの方程式にあてはめた。 $1a$ に距離を代入、あとはノードの数だけそれを繰り返すのだ。個々の a の答えを Σ に従って加算する。

求められた計算結果は、 1.17 だった。

彼女はケケケと奇声をあげた。

「プレフィックス符合、失格！ 失格！」喚いた。

親の仇のごとく、自分で描いたノード木を指差してせせら笑う。口腔から溢れ出て、ガラステーブルに壮大に唾が飛んだ。サウナのごとき部屋はくそ暑く、額には玉汗が浮かび、頬骨へと際限なく伝っている。が、そんなことは気にしない。

喚き散らすと落ち着いてきた。

よし、次だ。次は、テキトーな表を書いて、MD復号した場合のビット誤りの確率を求めるのだ。さらにクールダウンする為に必要なのだ。

エイダはイライラが募った精神状態にある場合、単純な情報理論の演算をするのが癖であった。学生時代から、イヤなことがあれば、こうして計算してきたのだった。

数式を解いていると、心持はクールダウンするどころか、むしろ熱くなり、胸が躍っているのを感じた。全身の毛が逆立ち、毛穴という毛穴が拡大している。

たまにはクラシックをやめて、流行ポップスを流している所為もあるかもしれない。丁度頃合を見計らったように、切り口上にも似た旋律が耳へとやってきている。

一応これはラップなのだろうか、しかし、エミネムのようにその歌詞や歌い口にバイオレンスさは少しも感じられない。アメリカ発の黒人音楽は何だっけそうだが……ゴスペルだろうと、ジャズだろうと、どこかに抵抗の声がある。もっとも、エミネムはコーカソイドなのだが。それに、流行というには、このポップス——ちよっと旧いか。

「おい……」

肩を叩かれた。

自分の肩を叩く人間なんて、今のところ一人しか思いつかない。チャールズ・バベッジ。こいつだ。

「うわあああ！ 見たな！ 見たなあ！」

ぎゅるんと音がしそうなほどの速度で肩を叩いた人物——バベツジを見た。彼は見るからに変ちくりんな顔をしていた。口の端が引き攣り、ぴくぴくしている。エイダは彼の仕草を憫笑であると取った。

「見たけど……ね」

素早くチラシをくつしゃくつしゃにして、やおら屑籠へと放った。重力に引かれて放物線を描くには描いたが、残念なことに暴投だった。縁にかすりもしやしない。むなく真紅色のカーペット上に落ちて転がった。

「と、ところで——バベツジッ！」

紅潮する頬を隠しながら、エイダは叫んだ。

唐突に怒鳴られてしまい、バベツジはたじたじだ。一步後退すると、目を白黒させた。彼の反応は至極まっとうだった。

「何だよ。いきなり」

「どどど、どうして私がこんなことになってるのか、解ってるんでしょうねッ！ 解ってるんでしょうねッ！」

憤懣やるかたない彼女にバベツジは首をかしげただけだった。その態度がますますエイダを怒らせた。

「いや、さっぱりだよ……」

「預金通帳。この残高はいい」

通帳をガラステーブルに投げた。今度は上手い具合に天板に載った。

「ふむ……」

預金通帳に続いてエイダが取り出したのはびつちりと小難しい日本語が書かれた紙束。甲とか乙とかいう文字が特に目立つ。むんずと、それらをバベツジの胸元へと突き出す。「これに見覚えは？」

「ある」

「バー——ベツジいいい！」

「だから、何なんだよ」

「何で、そんなに平然なんですかね、あんたは！」ばっしばっしと

紙束を叩く。「借用書！　これ、借用書だから」

「そうだねえ」さも当たり前といわんばかりである。それがどうした？　とばかりに顔色は変わらない。

「借主があんたなのはいい。でも、何で保証人の欄にオーガスタ・エイダ・ラブレスと書いてあるわけ？」

「俺たちは運命共同体だ。それに、この国は印鑑社会でね、江戸時代はサインだったのに不思議だよなあ。——でも、苦労したんだぜ？　ラブレスの四文字をちっこい印鑑に入れてもらうのは……」

「はあ？」もはや、エイダの綺麗なかんばせは、鬼の形相に成り代わっていた。それでも、バベツジは泰然としている。彼女は続けた。「ふざけんな、ふざけんな、ふざけんな」三回も言ってしまった。

「サービスは上手くいってると思うんだ」

「どこがよ？」バベツジを睨みながら、エイダは少しだけ矛を後退させた。「——このまえリストランテに連れていってくれたわね？」

「ああ」

「てつきり、纏まったお金が入ったからだと思ったのよ。メニューはペツシエだったけど美味しかった。プリモピアットもパスタシユッタだったけど、なかなかだった。私はピツアの方が好みなんだけれど……」

バベツジは笑顔になった。自分がチョイスした料理屋を褒められて嬉しいのだろう。意外と厚い胸板を逸らした。ジヨリジヨリと剃り残しのヒゲをかきあげる。

「だろう？　あそこは二つ星——」

バベツジは最後まで言葉を言えはしなかった。エイダが大声を張り上げて、彼の言を遮った所為だ。

「バー——ベツジいいい！」

「だから、何をそんなに怒っているんだい？　もしかして、月の……」

「このオタチンのトーヘンボクが！」一旦言葉を区切る。「you the fuckin' fuck, fuck your f

uckin' mother ass hole!」ぜいぜいと肩をいからせて、さらに言い募る。「testa di cazzo, porco di puttana!」ズレてしまったやぼったいメガネを直す。「ハアハア……で、この借金は？　なんで金を借りる必要があるわけ？」

「そりゃ、βテストだから……。収入は……」

「ほう……」悪意がやたらめったら籠った歯軋りを二回。ぎゅち、ぎゅち。「あんたは——いつたい、どこのオンラインゲームの会社のプレジデントなんだろうね……。残念なことね、世界の金持ちランキングに入るお兄ちゃんは、あんたにはいない」

遂にバベッジの襟首を掴んだ。ぐいっと引き寄せるが、身長差があるので下方へ引く張るかたちになってしまふ。ただでさ、皺だらけの汚ったないアルマーニのシャツが、ますます汚くなった。

「——エイダ」

「βテストとサービス開始は違うでしょうッ！」

「まあ、いいじゃないか。俺たちはフェイクの色々な姿——いや、フェイクと人の関係性かな。見聞したんだ。何事も経験だよ。それでオールオーケーさ」

「全然、よくない……」

「俺は識りたかったんだ。とつくの昔に知性を求める人工知能研究は頓挫して久しいけれど、やっぱり夢があるからね——」

いつのまにやらバベッジのペースになっている。彼は訥々と語っている。

「むぐ……」

「結果を言えば何も解っちゃいないんだがなあ。チューリングテスト自体が何なのか——と言うか、知性の定義こそが曖昧だ。本当に知性があるのかどうかすら、誰も証明できちゃいない。哲学の領分だと人はいうだろう。しかし、本当にそうだろうか？　哲学なんてのは、社会的落伍者の放言に過ぎず、だからこそ——」

ダメだ、こりゃ。エイダは頭をかかえた。

この男はコンニャクだ。

現代の技術では、つぶつぶのない綺麗なコンニャクだつてつくれるのに、あえてそれを日本人はやらない。できるのに、やらない。そして、コンニャクはルパンザサードの相棒の一人——五右衛門の斬鉄剣でも切ることができないのだ。

エイダはこれ以上の追求を諦めた。バベツジの漫談に耳を貸す気もさらさらなかった。だから、フランス「シューベルトの交響曲第七番をかけてやるのだった。耳にうるさいほどの大音量で、だ。

襟首の拘束を解くと、バベツジは襟足を整えてから言った。「未完成から始める物語つてもオツだぞ」

この男、こちらの意図を全く理解していない。βテストなんかしていることを皮肉る為に流したというのに……。

「バー——ベツジいい!!!!!!」

勢いよく机を蹴った振動で通帳がめくれた。最後のページに記載された残高は、あいも変わらず五円だった。憎たらしい五円め。二度と賽銭箱に、あのくすんだ金色の穴空き硬貨を投げることはないだろう。

交響曲第七番『未完成』は暑苦しい室内にオーボエの音色を響かせていた。

そういえば、オーストリア映画に『未完成交響楽』という作品があつて、その中に「私の恋の終わらぬように、この曲も終わらない」という科白が出てくる。エイダはそれを胸中でもじつた。

「私の悩みが終わらぬように、給料未払いも終わらない」……なんてね。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8066h/>

誰が見る、今宵の虹

2010年10月8日15時43分発行